

令和7年度

事業報告書



研究紀要 第127号

岩見沢市立
教育研究所

「令和7年度の事業」を終えて

本年度は、4つの運営方針のもと、5つの重点推進事項を掲げ、各学校から選出された所員をはじめ、研究員・専門員の皆様と共に計画した6つの事業を推進してまいりました。各事業を滞りなく実施することができましたのも、所員の皆様をはじめ、各学校の深いご理解と多大なるご協力のおかげであり、心より感謝申し上げます。

事業の推進に当たっては、岩見沢市が目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現を中核に据え、学校への支援、授業改善、教職員の育成、コミュニティ・エリアへの支援といった視点から、各事業の関連性を意識した取組を進めてまいりました。とりわけ、「授業時数特例校」や「研究開発学校」に関わる取組の発信や、公開研究授業への支援、生成AIを活用した授業分析などを通して、各校が主体的に授業や教育課程を見直すための手がかりを共有することができました。

また、研究事業においては、部会研究の成果を教頭・研究担当者研究協議会等を通して共有し、全国学力・学習状況調査の結果を授業改善や校内研究につなげる視点を広げてきました。小中9年間を見通した指導の在り方や、子どもの変容を見取る視点が各学校で共有され、研究の質的向上につながってきたものと捉えています。

さらに、経営塾・養成塾・実践塾を中心とした研修体系により、管理職から若手教員まで、キャリア段階に応じた人材育成を進めるとともに、特別支援教育、不登校対応、危機管理、ICT活用等の研修を通して、教職員の専門性と実践力の向上を図ってまいりました。研究指定校を核としたコミュニティ・エリアでの取組や、研修・会議のICT化も進め、学校・地域と協働した学びの広がりが見られました。

一方で、児童生徒の学力向上は引き続き重要な課題であると受け止めています。今後は、各種制度や研究・研修、事業が、課題解決により直接的に寄与するものとなるよう、エビデンスに基づいた事業内容の充実を図り、学校現場に一層寄り添った研究所運営を進めてまいりたいと考えております。

結びに、本事業報告書に掲載した取組や成果につきまして、皆様から忌憚のないご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。改めまして、本年度の当研究所の事業に対するご支援に感謝申し上げますとともに、本報告書の発刊のお礼とさせていただきます。

令和8年2月吉日

岩見沢市立教育研究所長 砂川 昌之



岩見沢市立教育研究所 事業報告書 目次

1 令和7年度の運営方針と事業内容	1
当面する5つの「重点推進事項」について	4
(1) 新教育課程編成・実施に向けた各学校への支援	
(2) コミュニティ・エリアへの支援	
(3) 研究・研修のICT化の推進	
2 事業報告	
(1) 「Ⅰ調査」事業について（概要のみ掲載）	6
・全国学力・学習状況調査結果の分析（報告書参照）	
・全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析（報告書は今後作成予定）	
・デジタル社会科副読本「いわみざわ」の改定	
(2) 「Ⅱ研究」事業について	
・「教科等」研究部会	8
・「道徳科」研究部会	14
・「外国語」研究部会	20
・「情報教育」研究部会	26
・「岩見沢型ピアサポート」特別研究部会	30
(3) 「Ⅲ養成」事業について	
・養成講座（経営塾、養成塾、実践塾）	36
(4) 「Ⅳ研修」事業について	40
・「岩見沢の教育を知る会」	・教頭・研究担当者研究協議会
・特別支援教育研修講座	・特別支援教育支援員研修講座
・「救急・救命」研修講座	・「食物アレルギー」研修講座
・ICT活用に関する研修講座Ⅰ	・ICT活用に関する研修講座Ⅱ
・不登校対策研修会	・事務職員研修講座
・教育講演会	
(5) 「Ⅴ連携」事業について	
・北海道及び全国教育研究所連盟との連携	46
・北海道教育大学岩見沢校等との連携	47
(6) 「Ⅵ普及」事業について	50
・情報の発信（所報「いわみざわ」、研究所「ブログ」）	
・岩見沢市教科書センターとしての機能	
3 施設の貸与及び利用状況	52
4 令和7年度研究所職員一覧	53

1 令和7年度の運営方針と事業内容

「子どもが煌めく」教育の実現に向けて

令和7年度教育研究所

「煌めく子ども」とは

- 困難や失敗を恐れず、前向きに行動しようとする子
- 他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子
- 自己の心と体に関心を持ち、生きる喜びを実感できる子
- ふるさとを愛し、地域社会に貢献できる子

教育研究所の役割
 「煌めく子ども」の実現に向けて学校への支援
 ○「煌めく子ども」育成に向けての調査・研究
 ・目的が学校種と親向けの調査提供
 ・目的が授業形態の研究・提示
 ・目的が授業種と親向けの研修提供と育成
 ・教育活動に対するICT活用とある研修活動の推進

運営テーマ

「子どもが煌めく教育」の推進
 「学び続ける学校」づくりへの支援

運営方針

- ①岩見沢市が進める教育実現に向けてのコンサルティング活動の推進
- ②岩見沢市が進める教育の実践検証の推進
- ③岩見沢市が進める教育を実現できる教員の養成
- ④岩見沢市が進める教育の発信

当面する5つの重点推進事項

- ①新教育課程編成・実施に向けた各学校への支援
 - ②今日的な教育課題解決に向けた授業改善への実践的研究
 - ・「教科等」研究部会
 - ・「道徳科」研究部会
 - ・「外国語科」研究部会
 - ・「情報教育」研究部会
 - ・「岩見沢型P・S」研究特別部会
 - ③三塾の充実
 - 経営塾 高成塾 実践塾
 - ④コミュニティ・エリアへの支援
 - ⑤研究・研修のICT化の推進

I 調査

◎今日的な教育課題に係る調査
 ・教育行政方針推進に係る調査・実施把握
 ・全国学力・学習状況調査の分析
 ・全国学力・運動能力、運動習慣等調査の分析
 ・デジタル社会科副読本の活用
 ・新教育課程編成・実施に向けた調査・研究

II 研究

◎今日的な教育課題の解決を図る研究・新定校事業の推進
 ○「教科等」研究
 ○「道徳科」研究
 ○「外国語科」研究
 ○「情報教育」研究
 ☆研究特別部会「岩見沢ピア・サポート」
 ＊研究指定校

III 育成

◎教職員の資質能力向上のための、キャリアに届いた育成講座の開催
 ○育成講座（キャリアステージでの力量の発揮）
 ・経営塾
 ・高成塾
 ・実践塾
 ○協成向上講座
 ・高成塾
 ・実践塾
 ○研究担当者育成
 教頭・研究担当者研究協議会（4回）

IV 研修

◎教職員の専門的力向上のための研修講座の開催
 ・I 「岩見沢の教育を知る」研修講座
 ・特別支援教育研修講座
 ・特別支援教育支援員研修講座
 ・事務職員研修講座
 ・「異物アレルギ―」研修講座
 ・「飲食・救命」講習会
 ・Ⅱ ICT活用に関する研修講座Ⅰ
 ・Ⅲ D-Iいわみさわ授業活用研修会
 ・Ⅳ 不登校対策研修会
 ・Ⅴ 教育講演会
 ・Ⅵ ICT活用に関する研修講座Ⅱ

V 連携

◎北海道教育研究所連盟との連携
 ・道研連研究大会への参加
 ◎教育大学岩見沢校との連携
 ・出前授業、研修講座への講師協力
 ◎施設開放・運営
 ・研究団体、大学、地域連携型教育への開放

VI 普及

◎情報の発信
 ・所報「ie-Labo」年2回紙面配布
 ・年3回ブログ配布
 ・ブログ発信
 ・教育情報の提供
 ・研究・研修のICT化
 ◎教科書センター開設
 ・教科書の展示



「煌めく子ども」とは

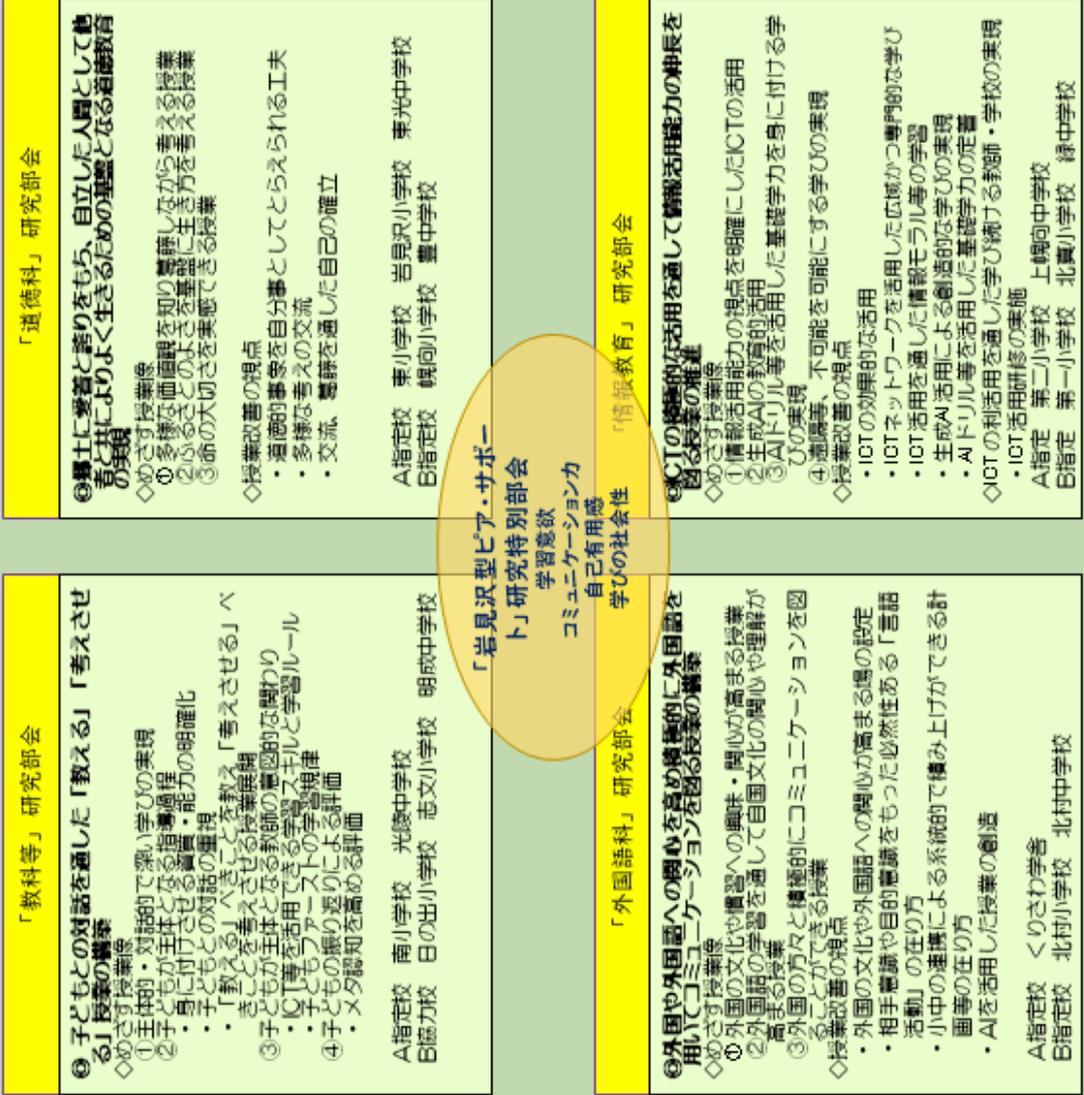
- 困難や失敗を恐れず、前向きに行動しようとする子
- 他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子
- 自己の心と体に関心をもち、生きる喜びを実感できる子
- ふるさとを愛し、地域社会に貢献できる子

令和7年度「学校教育の推進」から

- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、教師主導から学習者主体による授業の転換を図る
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って、身に付ける資質・能力を明確にし、教師は子どもとの対話を通して、「教える」べきことを教え、「考えさせる」べきことを考えさせる授業を展開
- 授業時数特別校制度の活用等や学校として統一性・一貫性のある校内研修の推進と活性化を図る中で、教職員一人一人の当事者意識をより一層醸成し、カリキュラム・マネジメントに基づいた、特色ある教育課程の工夫・改善を行い、「学校づくり＝授業づくり」という視点のもと、「学び続ける学校」への組織的な改善
- 各種調査等による検証と対策の徹底やコミュニケーションにおける義務教育9か年を見通した組織的な学力向上、並びによりよい学習集団づくりにつながる「岩見沢型ピア・サポート」の推進
- GIGAスクール構想によるICT端末を効果的に活用した授業づくりやデジタル教材等を活用した授業実践と基礎学力の定着、及び家庭での学習習慣の醸成に向けた取組を推進
- 「英語が使える岩見沢の子ども」の育成に向けて、外国語指導助手（ALT）の有効活用はもろんのこと、土曜キッズ英会話やAIを活用した英語学習などを行い、外国語教育の充実
- 騎士資料や蘭読本等を活用し、子どもたちが岩見沢の人・歴史・文化・自然・産業などを学ぶことにより、騎士に愛着と誇りを持つよう「ふるさと教育」を推進
- 道徳教育の充実を図り、命を大切にする心、他人を思いやる心など、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる「心の教育」を推進

学習者主体による授業づくり

Ⅱ 研究



学び続ける学校

授業改革

教職員の育成

岩見沢の教育を知る会

年度始め授業公開

研究指定校授業

教育講演会

研究指定校公開研

子どもの姿での検証

三塾の開催
経営塾
養成塾
実践塾

岩見沢型ピア・サポート研修会
年3回開催

教頭・研究担当者研究協議会
年4回開催

Back casting

Agile

Try & Error



当面する5つの「重点推進事項」について

教育研究所の今年度の運営方針に示した5つの「重点推進事項」のうち、②「今日的な教育課題解決に向けた授業改善への実践的研究」（部会研究）と③「三塾の充実」については、それぞれ別に本報告書で記載するが、ここでは、残りの3つ①④⑤の事業の概要と成果等について簡単に報告する。

1 新教育課程編成・実施に向けた各学校への支援

授業時数特例校制度の充実に向けて、文部科学省授業時数特例校の岩見沢小学校と研究開発学校の緑中学校の取組の概要について所報で紹介した。

緑中学校では、「エデュタイム」の創出により個々の「学び直し」を行い基礎・基本の定着を図った取組や、岩見沢小学校では「岩見沢型ピア・サポート」の実施など、それぞれの学校における特色ある取組を紹介した。

3 「新教育課程編成・実施に向けた調査・研究」について ～取組の紹介～

各校において、子どもたちの実態を踏まえ、目指す教育目標の実現に向け、時数や1単位時間の有効化も含め、全教員の創意工夫により教育課程の編成・実施を行っています。

【授業時数特例校「新教育課程編成・実施に向けた取組」について：岩見沢小学校】

本校では、学校として目指す資質・能力の育成及び持続的な学習の充実を図ることを目的に、授業時数特例校制度を活用した特色ある教育課程を編成している。「総合的な学習の時間」や「特別活動」の時間を充実し、ふるさと教育の一環として本校卒業生である華宮川健一氏の偉業を学ぶ「くりやかわり学」をはじめ、「米学」「バラ学」「放銃学」の学習機会を設定、ICT教育の体系的なカリキュラムの構築、「岩見沢型ピア・サポート」を中心とした安心・安全な集団づくりや個を伸ばさせる全校的な活動を展開している。また、1・2年生においては、「体育」の授業時数を増やし、体力向上に加え、近年注目されている「運動が学力向上に寄与する」という研究成果を踏まえた取組を進めている。

(1) 授業時数特例校制度を活用した教育課程の編成
各学年・各教科等の標準時数から35時間増を「総合的な学習の時間」及び「特別活動」（1・2年生のみ「体育」）に充当し、教育課程を編成している。

- ① 【特・活】自己肯定感を高め、安心・安全な環境づくりを目指す「岩見沢型ピア・サポート」
 - ② 【総合】新設「くりやかわり学」等、ふるさとへの誇りを育む教育活動
 - ③ 【総合】ICTを効果的に活用した情報活用能力の育成
 - ④ 【体育】運動習慣の定着による体力向上と学習効果の向上を図る取組
- (2) 実施事例（2年生）
① 時数増量：体育の授業時数を年間13時間増加
② 本取組による効果：教育大学森田教授と連携・協

学年	標準時数				増量時数				削減時数			
	総合	特別	体育	その他	総合	特別	体育	その他	総合	特別	体育	その他
1年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
2年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
3年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
4年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
5年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
6年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
合計	600	600	600	600	600	600	600	600	600	600	600	600



2 コミュニティ・エリアへの支援

コミュニティ・エリアへの支援について、今年度も、研究指定校の研究を進める中でその取組の充実を図ってきた。

東光中学校区内においては、道徳教育研究部会の取組の中で、テーマに沿った各校の道徳の公開授業をそれぞれ展開しながら、公開研においてその成果を広く公開した。

昨年度に引き続き豊中学校区・上幌向中学校区では、ICTを活用した情報活用能力の伸長を図る授業が展開され、主体的な学びとICTを生かした授業づくりについて、活発な研究協議が行われた。

また、くりさわ学舎・北村中学校区においては、くりさわ学舎の公開研に向けて中学校区をまたいで連動した取組が行われ、小・中の9カ年を見通した外国語活動における英語のカリキュラムと教材の開発を行い成果を上げている。

3 研究・研修のICT化の推進

研究所が行う、研究指定校打ち合わせ、一部の所内会議、社会科副読本編纂委員会等の会議において Webex Board によるテレビ会議とし、効率化と積極的な活用を図った。

また、中央の著名な講師によるライブ講義などを視聴できる環境を準備し、各学校にも参加の案内を行い、最新の教育の動向について学ぶ機会とした。



2 事業報告

「1 調査」事業について



「Ⅰ 調査」事業について

1 全国学力・学習状況調査結果の分析（詳細は「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査結果報告書」参照）

（1）全国学力・学習状況調査 調査結果報告書（岩見沢市版）の作成

令和7年度の全国学力・学習状況調査については、4月17日（木）、（中学校理科は14～17日のいずれか）に市内小学校第6学年と中学校第3学年1,010名が参加した。

その結果、岩見沢市の児童生徒の学力の状況は、小学校は、国語・算数・理科とも全国平均より低く、中学校は、国語・数学は全国平均とほぼ同様、理科は全国平均より高くなっている。

研究所では、今回の調査結果を受け、市内版の調査結果報告書を取りまとめた。その中で、国語及び算数・数学、理科の調査結果から見える課題等と指導改善のポイント、全国平均と比べて3ポイント以上差がある問題についての課題等を示した。

また、児童生徒質問調査からは、児童生徒の学習意欲や家庭学習習慣、早寝早起き・朝食等の基本的な生活習慣、規範意識や自己有用感等を過去5年間の経年変化で捉え、傾向を把握できるようにした。ICTの活用は全国・全道と比較して相当高い状況が継続されている。

（2）「令和7年度全国学力・学習状況調査結果活用検討委員会」の開催

今年度実施の調査結果から、本市児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、学習指導の充実に資することを目的に「令和7年度全国学力・学習状況調査結果活用検討委員会」（構成員 校長会2名、教頭会2名、主幹教諭2名、市内小・中学校の研究担当者4名、市教育委員会指導室3名、教育研究所3名）を設置し、10月8日に当教育研究所で開催した。

協議では、「学習ルール・規律が整わないと授業改善は始まらない。対話を通じた深い学びに繋げるため岩見沢型ピア・サポートを基盤に心理的安全性の高い落ち着いた学習集団づくりが必要」「ゲーム、スマホの使用等、家庭での基本的な生活習慣の確立に加え、AIDRILの活用等、自律的な学習習慣の確立が重要」「小中で統一性・一貫性のある取組が重要」「地域、関係機関との協働も検討したい」等、現状や改善に向けての取組が議論された。

結果を踏まえ今後、各学校が取り組むべき「岩見沢市の3つの方策」について、①「『主体的・対話的で深い学び』の視点に立って、身に付けさせる資質・能力を明確にし、教師は子どもとの対話を通して、『教える』べきことを教え、『考えさせる』べきことを考えさせる授業の展開」②「子どもたちの学びへの意欲を高め、将来に対する夢や希望を育むため、中学校区で目指す子ども像を共有した取組の推進」③「学力の向上と学校生活の安定の基盤は『子どもたちの規則正しい生活』と捉え、その確立と改善に向けた啓発等の取組の推進」が共通認識された。委員長が「教頭・研究担当者研究協議会」で説明し、市内各校で共有された。

2 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析

今年度も毎年、文部科学省が4月から7月末の期間に小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の5年生、中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校前期課程及び特別支援学校中学部の2年生の全児童生徒を対象として実施している全国体力・運動能力、運動習慣等調査に参加した。

令和6年度は、体力合計点では、小学校は男女ともに全国平均とほぼ同様、中学校は男女とも全国・全道平均より低い。種目別では、小学校8種目中、男子で5種目、女子が4種目で全国平均を上回った。中学校では、男女ともに全9種目において全国平均を下回った。また、1週間の総運動時間は全国と比べ、小学校の男女ともに全国平均を上回っているが、中学校は男女とも下回るといった調査結果であった。

今年度も昨年度同様、岩見沢市の児童生徒の体力等の状況について分析を行い、3月に「調査結果報告書」で詳細を示す予定である。

その結果を踏まえ、各学校が取り組むべき方策などについて報告書で示していく。

3 デジタル社会科副読本「いわみざわ」の改定

令和5年8月から供用され、各小学校で利用されているデジタル社会科副読本「いわみざわ」に関して、各小学校の担当者等からなる編纂委員会を組織し、実際の改定作業や「D-いわみざわ授業活用研修会」など、その他普及啓発に関わる取組を推進した。

(1) 第1回小学校社会科副読本「いわみざわ」の改訂等に係る編纂委員会

①実施月日 令和7年7月18日(金)

②内容

- ・委嘱状交付
- ・教育長挨拶
- ・説明

本編纂委員会について

昨年度の編纂委員会の活動について

今年度の編纂委員会の活動について

D-いわみざわ授業活用研修会について

第2回編纂委員会の予定について



(2) D-いわみざわ授業活用研修会

①実施月日 令和7年10月30日(木)

②内容

岩見沢市立岩見沢小学校において、第4学年の授業公開と協議を行った。

授業においては、社会科「ごみのしよりと利用」の様子が公開された。

子どもたちはデジタル教科書を活用し、写真や資料を読み取りながら、「ごみはどのように分けられているのだろうか」という課題を自分たちで設定し、話し合いを通して考えを深めていた。

その後に行われた研究協議においては、デジタル版の副読本活用の効果と意義について熱心に協議がされ、デジタル版の副読本の効果的な活用によって子どもの探究的な学びを促す授業づくりの可能性について理解を深めていた。



(3) 第2回小学校社会科副読本「いわみざわ」の改訂等に係る編纂委員会(リモート開催)

①実施月日 令和7年12月10日(水)

②内容

- ・「令和8年度に向けて修正等が必要と考えられる箇所(副読本、指導計画評価規準暫定版)」について、データの差し替え、最新データに基づく文章の修正

- ・今後の普及啓発について



「II 研究」事業について



「教科等」研究部会

1 部会テーマ

「仲間の声を受けとめ、考えを深める子どもの育成」～声がつながる授業の創造を通して～

2 研究目的

現代社会は、生成 AI をはじめとするデジタル技術が飛躍的に発展し、学校教育には子ども一人一人が自らの人生を舵取りする力を身につけ、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を育成することが急務として求められている。中教審教育課程企画特別部会によると、探究的な学びに取り組む児童生徒は「課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいる」などの割合が高く、探究的な態度こそが未来を生き抜く基盤であることが示されている。しかしながら、不登校児童生徒数の過去最多更新や教師の長時間勤務・教師不足など、課題が複雑化・困難化しており、今後の改訂を見据えた学習指導要領の趣旨を着実に実現する上で、喫緊の課題となっている。

このような状況を踏まえ、子どもたちが自立的に学び未来を切り拓く力を育むため、そして限られたリソースの中で質の高い学びを実現するため、子どもたちの「声（言葉）」に焦点を当て、教室で交わされる子どもの言葉が思考を形成し、やがて子どもの人生をつくる土台になるという仮説のもと、教師の指導性、子どもの活動、そして評価・振り返りのプロセスを「言葉の変容」という視点で連動させる授業創造を実践的に追究することが重要である。

本研究における「考えを深める」とは、子どもが自己の学びにおいて、考えが言葉として表出され、その言葉が多面的に変化し、自ら新たな概念を獲得したり形成したりする姿のことであり、「声がつながる授業の創造」とは、様々な教室で授業を通して子どもが考えを深めるための教師の働きかけを探究し、子どもの変容を見とり指導を改善し続けることを目指すものである。

3 テーマを具現化するための研究の視点

(1) 学習規律 (2) 学習事項 (3) 交流 (4) 教師の発話 (5) 振り返り

4 研究年次

令和6年度から令和7年度（2年次研究の2年目）

5 研究実践の具体

(1) 研究の全体計画

本研究においては、部会内で共通理解を図った5つの研究の視点と研究仮説をもとに、それぞれの部員が主となって深めた実践を基盤として研究をすすめることとする。

研究の視点	部員	研究仮説
学習規律	高橋	学習規律を「守る」だけでなく、「決める」ことは自己規律の育成につながる。
学習事項	坂下	学習事項から単元を見通すことは、主体的・対話的で確かな学びにつながる。
交流	西亦	明確な意図を持って交流することは、学びへの意欲を高め、自己決定を促すことにつながる。
教師の発話	堂前	教師の指示・発問・説明を明確にすることは、生徒が安心して発言し、自己の考えを深めることにつながる。
振り返り	伊丹	他者の意見を取り入れた振り返り活動は、新たな気づきと自己調整力の育成につながる。

(2) 研究実践と検証

① 学習規律

ア 研究の意義と仮説

「学習規律を『守る』だけでなく、『決める』ことは自己規律の育成につながる」

学習規律は、子どもたちが安心して学びに向かい、互いの考えを尊重しながら学習を

深めていくための重要な基盤である。これまで、一定の学習規律を共通理解として示すことで、学びの場が成立してきた。しかし、学習の形態や子どもたちの実態が多様化する中で、固定された学習規律だけでは、一人一人の学びを十分に支えることが難しくなっている。これから求められるのは、学びの本質に迫るために機能する、柔軟な学習規律である。そのためには、子ども自身が学びに必要な規律を考え、自らの行動を調整する力を身に付けていくことが重要となる。教師が一方向的に定めるのではなく、必要な学習規律を子どもたちと共に決め、実行していくことで、主体的に学び続ける力が育まれていくとの仮説を立て実践した。

イ 自己規律育成までの段階的指導

本研究では、自己規律の育成を目指して次の5段階からなるサイクルを実践した。

1. 教師が最低限の学習規律を示す（目的・目標・方法）。
2. 学習規律を守ることで生まれる変容を価値づける（語り・通信・写真）。
3. 変容プロセスを振り返り、自分たちで規律を考える（学級活動）。
4. 学習規律を守ることで生まれる変容を自分たちで価値づける（変容の可視化）。
5. 学習規律を決めるサイクルは、一人一人の自己規律を育む。

ウ 「家庭学習ノート」導入と「自己調整力」の育成

学習者として自立する子どもの姿を目指して家庭学習の取組を導入した。これは、子どもが学習内容を選択・決定する、主体的に学ぶ一歩目を踏み出すことを意図している。「学ぶは真似ぶ」を具現化するために導入した家庭学習交換ノートは、友達の方法を真似する活動を通じて、アイデアがない時の参考にしたり、字を丁寧に書く動機になったりする効果を生み出した。

2学期には「学習規律を『守る』から『決める』という段階に進むため、家庭学習の約束について子どもたち自身で話し合いを行った。その結果、「できる人は2ページやってくる」といった少し背伸びをするめあてが子どもの声から生まれ、翌日には実際に家庭学習の量を増やす児童が見られた。これは、自ら学びの変容プロセスを振り返り、自己調整力を発揮し始めた萌芽と捉えられる。子どもからは「家庭学習だと、4教科を選んで勉強できる」、「自分に合わせて苦手な勉強ができる」という自己決定ができることを評価する声が聞かれた。また、頑張る理由として「先生のコメントが嬉しいから頑張れる」という意見も挙げられ、教師の価値づけが習慣に繋がり、やがては文化に昇華されることも示唆された。

学級活動では、子どもが司会や記録役を務め、意見の拡散・収束・決定プロセスに取り組んでいる。特に「決定」する場面は難航するが、この経験によって子ども自身が「決めることは難しい」という認識をもつことは、人生の舵取りをするための一歩目になるはずである。



ある日の帰りの会で、「みんなやればできるから、やってほしい」という子ども自身の願う学級像に基づく「ふりかえり」が定番化した。これは、担任の意図とは別に、子どもの姿から自発的に規律が誕生した瞬間であり、自己規律の芽生えとも言える。子どもとともに学習規律を創る教師の構えは、子どもの自己規律を育む礎となる。

② 学習事項

ア 研究の意義と仮説

「学習事項から単元を見通すことは、主体的・対話的で深い学びにつながる」

子どもは、学習を通して新しい知識や概念を獲得していく。その学びを深く確かなものにするには、子どもたちが主体的に学習できる環境を整えることが重要だと考える。これまで私たちが単元で教えるべき内容を整理してきた「指導事項」を「学習事項」として捉え直し、単元のゴールを子どもと共有することで主体的に学習に取り組めると仮説を立てて実践を行った。

イ 見通しをもつための学習事項

単元導入時に学習事項や単元計画を共有し、子どもが学習を俯瞰的に見られるように

- アンケートによると、
- 話し合いが好き 86% ○話し合いは役に立つ 96%
 - 意図を明確にすることでやる気になった 91%
 - 授業の最初に「何のために学ぶのか」「このあと何をするのか」がはっきりすると自分のやるべきことがわかり、学びやすくなる。
 - 「わからない問題があっても、話し合いによって理解が深まり、意図を持って学ぶことの大切さを実感できる」など、その効果を子どもが実感していることがわかった。
- 一方、意図を明確にしても自分の考えを持つことが難しい子どももいることや、また、話し合い場面が盛り上がることにより、話がそれてしまい、交流の意図が曖昧になっていくことも見受けられた。目的や方法が一過性のものであれば、学びは積みあがっていかない。交流の意図を明確にするだけでなく、より良い指導と評価を継続して探究していくことが重要であり、交流による成果だけでなく課題も共有し、より良い学習方法を子どもと共に創り出していく姿勢も必要となる。

④ 教師の発話

ア 研究の意義と仮説

「教師の指示・発問・説明を明確にすることは、子どもが安心して発言し、自己の考えを深めることにつながる」

教師の発話は、子どもの理解を支え、安心して学ぶための土台となる。自身の授業を振り返ると、学習のねらいが十分に共有されないまま活動に入り、子どもが何をどのように行えばいいかを判断できず、対話が停滞することもあった。そこで、教師の発話を「指示・発問・説明」の3つの視点から見直すことで、学習における子どもの迷いや不安を減らし、考えを深める学習に繋がると考え、仮説をもとに実践した。

イ 思考の視覚化

授業音声を録音し、NotebookLM を使って文字起こし・分析を行った。分析は、授業中の子どもの迷いや対話の停滞と教師の発話の関連を整理する目的で行い、「目的の不明確さ」「思考の焦点の曖昧さ」「一方的な説明」を課題と結論付けた。AI とのやりとりをもとに改善前（Before）と改善後（After）を次の表に整理した。

視点	Before	課題	After	変化
発問	「英語で何て言う？」 「この答えは？」	答えを待つ姿勢になり、ペアやグループのやり取りが短時間で終わる。	「どうしてその形になるの？」 「どちらの方が伝わりやすい？」	正答を問う発問に加えて理由や選択、比較を促す問いを増やすと、対話が一往復で終わらず、自分の考えを調整するようになった。
指示	「ペアで考えます。」 「ワークシートをやってください」	活動の目的が理解できず、教科書を見たまま止まったり、周囲をうかがったりする様子が見られる。	「考え違いをペアで探します。」 「単語を2つ以上使ってワークシートに書きます。」	手順の提示に加え、活動の目的と焦点を明示して指示をすると、すぐに活動する子どもが増えた。
説明	板書してそのまま演習に入る	理解のずれや誤用があっても個人のつまずきとして埋もれていた。	誤用を取り上げ「なぜこの形ではいけないの？」と子どもに問い返した。	理解のずれや誤用が表面化され、理由を説明し合いながら修正する姿が見られるようになった。

ウ 新たな発話へ

Before・After から、教師の発話によって子どもの思考が見えてきた。

発問は、理由や別解を問うことで、子どもが他者の考えをもとに自分の考えを修正するようになる機能があると確認できた。やらされている活動ではなく「なぜ？」を頭に

持って学習することは、主体的な学びの一丁目一番地である。指示は、単なる号令ではなく、活動の目的を添えて伝えれば一段と活発になることが明確になった。これまで停滞していると捉えていた子どもの姿は、困り感の表れだったのかもしれないと捉えると、説明は、一方的に終えずに理解度を確かめる必要がある。たとえ考えが間違っていたとしても、その間違いが共有され、修正していく過程が学びを深いものにする。

発問・指示・説明はそれぞれ独立したのではなく、場面に応じて組み合わせることで、子どもが迷わずに学習することができていた。しかし、教師の発話だけに着眼して授業改善を行えば良いというわけではなく、これらを組み合わせても、学習課題によっては子どもの対話が広がっていかない場合もある。さらに、子どもの迷いがなくなったことは、子どもの思考が深まることと必ずしも同義ではない。

これからは、子どもの姿を見取ることに加えて「今の説明で意味がわかる?」「比べて考えたことで何が変わった?」など、子どもに聞き取るための教師の発話を考えていきたいと考えている。

⑤ 振り返り

ア 研究の意義と仮説

「他者の意見を取り入れた振り返り活動は、新たな気づきと自己調整力の育成につながる」

家庭学習を進められない子どもは、「何から手を付けてよいのかわからない」と悩むことが多い。この実態をもとに授業を振り返る場面を設定し、自己調整力を育むことを通して、進んで学習に取り組めるようにしたいと考えた。さらに、他者との交流を通してメタ認知を深め、新たな気づきが生まれる学習プロセスの創造を目指す。

イ 自己調整力育成に向けた指導工夫

「評価<学習内容の定着」を目的としてロイロノートを活用したテストを定期的を実施している。同じテストを2回実施し、1回目は内容理解のため、2回目は評価のためとねらいを分けている。その上で、単元ごとに紙ベースのテストを実施して学習したことがどの程度定着しているかを確かめ、学習の成果と課題を還流している。

授業の課題解決時においては、評価規準を示すことで、課題解決の見通しを持ちやすくする。実験の考察を記入する場面では評価規準を参考にした後、さらに提示した評価の観点をもとに自分の記述を分析する活動を通して、メタ認知が可能になると考える。

このような指導工夫を土台として、学習の終末場面で行う振り返り活動がより良いものになるように「振り返りシート」を作成した。子どもの実態に応じながら形式の修正を繰り返し、記述内容を以下の3点に整理した。

- ・授業ごとの課題に沿った内容を自分の言葉でまとめる。
- ・学んだことを具体的に記述し、内容理解についての成果と課題を振り返る。
- ・課題解決の際にどのような手段で解決したか、その手段が適切かを判断する。

単元2 生命の連続性 (第1章 生物の成長と生殖)	
1. 生物の成長と細胞の変化	
学習内容について (理解したことや学び直しが必要なことを整理する)	学習手段について (課題解決の際に利用した手段が適切なものだったかを判断し、次の学習に活かせるようにする)
次の授業へ向け (学習理解度を結ばせた改善点や継続することを記入する)	学習理解度 (%)

ウ 不易と流行

ロイロノートによるテストは基礎知識の定着を目指している。始めた頃は15点満点中10点未満の子どもが多数であったが、繰り返すことで成長を実感した子どもは、短時間でも復習できることの良さに気付き、学び方を調整するようになっていった。ただし、その後に実施する単元テストとの相関から、一時的な記憶に留まっている子どもも見られる。単元レベルではもちろん、学びをもっと大きく捉えてデザインしていかなければならない。

評価規準を活用した課題解決と振り返りでは、どのような記述が自身の学習をより良くしていくかを確かめる子どもの姿が見られた。一方、実態をもとにより良い学びの形を切り開いていくための足場となる支援を考えていかなければならない。振り返りシートはAIを活用することで、効率よく一人一人の変容を見取ることができた。

当たり前に行ってきたテスト・交流・振り返りの意義や効果に目を向けることで、あ

らためて学習活動のねらいを意識することができた。新たな教育手法を探究することは重要であるが、それは新しいものを生み出すことばかりではなく、これまで取り組んできた学習活動を見つめ直し、子どもの現在地に目を向けることは私たち教師が変わらず持ち続けるべきであると考えている。

6 研究主体校・協力校との連動

部会でのこれらの話し合いをもとに南小と光陵中で公開授業を実施し、それぞれの教室で子どもが仲間の声に耳を傾け学習に臨む姿が確認された。詳細は、1月に実施される教頭・研究担当者会議で報告している。

7 成果と課題

(1) 成果 論点整理との方角的一致

本研究では「声（言葉）」を核とした授業作りを通して「仲間の声を受けとめ、考える子どもの育成」を目指してきた。これは「主体的・対話的で深い学び」を各教科・各教室レベルの言葉で捉えなおしたものであり、目指す本質は同じである。

教育課程企画特別部会から示された「論点整理」において、「主体的・対話的で深い学びの実現」を通じた目指す子ども像は「自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手」であると表現されている。中でも、各教科等の項では「生きて働く確かな知識の習得」「自分の意見を表現する活動の充実」「家庭学習の内容を自律的に決められるような段階的指導」と、本部会が実践的に研究をしてきた視点と一致する記述が見られる。これは、岩見沢市が進める教育活動の方向性は文部科学省が求める学びの在り方と方向を同じくすることの証明である。論点整理は続けて「言葉を用いて思考を深めていく指導」の必要性を提言し、まさしく「声がつながる授業の創造」は現場も行政も向き合っていて考えていく価値のある提案であると確信している。

各教科・各教室で見られた子どもの変容こそが、私たちが目指してきた研究のゴールであると同時に、それぞれのスタートとなった。「仲間の声を受けとめ考える子どもの育成」を各学校の実態と照応し、「考えは言葉によってつくられる」原則を教師間で共有することを授業デザインの出発点としていきたい。

(2) 課題

本研究は「学習規律」「学習の見通し」「交流」「教師の発話」「振り返り」の5つの要素が相互に連携することで「声がつながる授業」を創造する仕組みを検証した。この連携により子どもが安心して自己表現し、他者の声を受けとめ、それを通じて自らの考えを深めるといった主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践的知見を得ることができた。しかしながら、これらの成果は各教科指導・教室における一例であり、誰でもどこでも再現できるものではない。アンケート等で一定の成果を表すこともできそうであるが、一側面でしかないとも考えられる。

このような研究成果を踏まえると、本研究の課題は、デジタル技術を活用すれば自動的に子どもの学びが豊かになったり、教師の業務が簡素化されたりするという発想に立つものではない。むしろ、これまで蓄積されてきた教育実践を改めて見直し、その価値や課題を問い直すことを重視するものである。そのためには、これからの社会で求められる資質・能力とは何か、それを育成するためにどのような学びが必要なのかを明らかにするとともに、児童生徒観や授業観を問い直すことが欠かせない。なにより、教師一人一人がこれまでの自己の実践を振り返りに思考し、指導観や研修観の転換を図っていくことが重要であり、本研究は、そうした変容を支え、実践の質を高めていくための研究内容となることを目指している。

8 担当

部長：高橋 周（南小学校）

部員：坂下 邦子（志文小学校） 西亦 直明（日の出小学校）

堂前 勇太（光陵中学校） 伊丹 暁（明成中学校）

「道徳科」研究部会

1 部会テーマ

「郷土に愛着と誇りを持ち、自立した人間として他者と共によりよく生きようとする基盤となる授業づくりと子どもの育成」

2 研究目的

ふるさとのよさを基盤に他者と共によりよく生きようとする子どもを育てる道徳の授業を構築する。

3 テーマを具現化するための研究の視点

- (1) ふるさとのよさを実感し、そこで暮らし、成長しているという思いを抱かせる教材の開発と教科等との関連
- (2) 多様な感じ方や考え方に触れ、葛藤や共感・共有等を通して自己を確立できる指導の工夫改善
- (3) 子どもの変容を見取る評価の在り方

4 研究年次

令和6年度～令和7年度（2年研究の2年次）

5 研究実践の具体

今年度より、部会テーマを変更して設定している。令和7年度の岩見沢市の教育方針「子どもが煌めく」教育の実現に向けて、教育研究所においても今日的な教育課題解決に向けた実践的な研究を推進しており、その具体例の1つである「ふるさとを愛し、地域社会に貢献できる子」の育成を目指し、本部会で研究を進めてきた。

子どもたちが郷土の誇りや愛着を育むには、郷土の伝統や文化を理解し尊重するだけでなく、それらを受け継ぎ、守ってきた人々の思いにも目を向けることが大切である。ここでいう「伝統」とは、長い年月をかけ、世代を超えて受け継がれてきた生活様式や行事、考え方を指し、「文化」とは、人々が生活の中で生み出し、共有し、発展させてきた芸術・習慣・価値観などの広い営みを意味する。本研究では、これらに込められた人々の思いを大切にすることを通じて、教材開発及び授業実践を行ってきた。

- (1) ふるさとのよさを実感し、そこで暮らし、成長しているという思いを抱かせる教材の開発と教科等との関連

① 読み物教材を中心とした教材と道徳的価値への迫り方の工夫

自分たちで教材を開発するにあたり、まずは郷土愛に関わる道徳的価値にせまる定番の授業スタイルを確立する必要があると考えた。そこで、講師による誰もが取り組みやすい読み物教材を中心とした授業を行い、郷土愛の道徳の授業の在り方を学ぶことにした。

7月9日、東光中学校にて「祭りの夜に」（東京書籍2年道徳）を扱った研究授業を山崎慶子教諭が行った。授業の中で、生徒は対話を重ねながら、自分たちの住む街のよさや価値のあるもの（特産物や建築物、祭りなど）を思い浮かべ、岩見沢のよさを認識できた。また、授業の終末に岩見沢のPR動画を視聴し、岩見沢のよさをしっかりと心に残すことができた。課題として、岩見沢固有の体験や祭りの教材化が挙げられた。

また、同日、苫小牧市教育委員会教育部参事 東峰秀樹先生を講師にお招きし、「地域の宝」（光村図書1年道徳）を用いた示範授業を実施していただいた。導入で、事前アンケートからわかった郷土に対する生徒の思いに触れながら、よりレベルアップした地域との関わり方を主体的に考える授業展開が行われた。読み物の内容は、アコースティックバンド BEGINの楽曲「島人ぬ宝」の歌詞で、実際に音楽を聴きながら、歌詞に込められた「伝統や文化」

に関わるキーワードを抜き出していった。そこから、岩見沢の地域の宝に着目させ、生徒が自分事として、地域の人々とのつながりや思いに気づいていく展開で、生徒の笑顔があふれ、岩見沢に生まれ育ったことを誇れるような授業となった。その後の講演では、「教師の意図を明確にした授業構想がよい授業づくりの基礎であり、教師の指導観が大切である」と東峰先生からご示唆をいただき、郷土愛を育む道德の授業の在り方について学ぶことができた。



② ふるさとのよさを実感できるような地域に根差した教材の開発と教科等の関連

読み物教材は手軽に取り組みやすい反面が、ふるさとのよさを実感できるような地域の素材を活用した教材を開発する必要があることを再確認できた。岐阜聖徳学園大学山田貞二教授から「地域素材を道德の教材として扱う際に、内容が社会科や総合的な学習、学級活動にならないよう価値に迫る視点が必要である」との助言を得た。成功するポイントは、教材とするものに関わってきた人がどのような「思い」を大切にしようと思ったのかに着目することが示された。

ア 通学路の川にかかる「なかよし橋」の教材化

9月10日、東小学校にて、齊藤久子教諭による研究授業を行った。題材は、学校の前を流れる利根別川にかかる屋根付きの「なかよし橋」である。この橋は、屋根付きで独特の形状をしており、通学路となっているため、児童にとっても親しみがある橋である。



齊藤教諭は、橋の建設に関わった当時のPTA会長である武部さんがSNSで「なかよし橋」の紹介をしていることを知り、武部さんへのインタビューを行い、地域の人々の児童の安全を願って橋を整備した思いに焦点を当てた授業を展開した。児童は、身近な教材に強い関心を示し、毎日利用する橋の名前の由来や建築当時の地域の人たちの願いを想像しながら、より主体的に授業に参加していた。また、登下校で利用する橋に、これまで以上に愛着と誇りを持つ様子が見られた。



本授業は、地域素材を教材として活用する、有効性を示すモデル授業となった。

イ 岩見沢ゆかりのグラフィックデザイナー「栗谷川健一」氏の教材化と教科等の関連

12月9日、岩見沢小学校にて、同校出身である栗谷川健一氏を題材とし、馬場亜寿美教諭による提案授業（指導案作成者 茂古沼佳奈教諭）を行った。

栗谷川氏は、明治44年に岩見沢で生まれ、当時の岩見沢尋常小学校（現在の岩見沢小学校）へ入学。絵かきになろうと思ったのは、4年生のときで、師範を出たばかりの安部幸平先生に写生の面白さを教わり、夢中になったという。

岩見沢小学校は、現在の校舎に建て替えられた際、栗谷川氏の版画作品を各教室の廊下に1作品ずつを展示し、まるで美術館の中で授業が行われるようなつくりになっている。



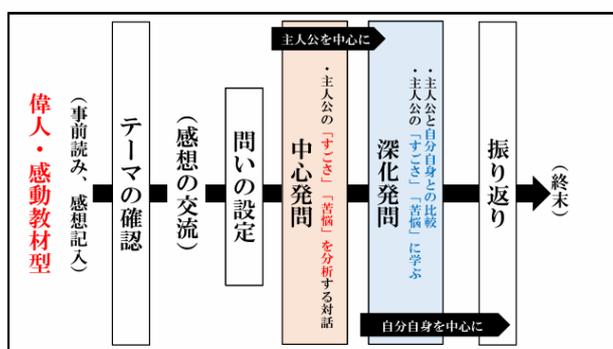
同校では、昨年度より、栗谷川健一氏を学ぶ授業「栗谷川学」を総合的な学習の時間を中心に実施しており、児童は、修学旅行中に札幌市内に展示されている栗谷川氏の作品を観たり、札幌在住のお孫さんである上野さんと交流したりするなど、栗谷川氏についての学習内容を深めてきている。

提案授業では、お孫さんである上野さんにインタビューを行い、栗谷川氏の作品に込めた思いや上野さんが祖父の作品を生涯かけて残していく決意を語った動画を視聴した。そして、中心発問には「栗谷川さんだったら岩見沢のどこを描くだろう」という問いを立てた。児童たちは、栗谷川氏が作品に込めた思いを想像しながら、岩見沢の魅力について理由と共に考えることができた。また、自分たちが地域にできることは何かを真剣に考え、多様な考えを深めた。課題として、郷土や作品への思いを自分事として捉えることは難易度が高かった点や多様な納得解をどのように見取り、評価していくのが挙げられた。

この道徳の授業は、前述のように、総合的な学習の時間と関連しており、教科等横断的に実践することができた。

- (2) 多様な感じ方や考え方に触れ、葛藤や共感・共有等を通して自己を確立できる指導の工夫改善
郷土愛に関わる道徳的価値において、多様な感じ方や考え方に触れ、葛藤や共感を通して多くの対話を重ねながら他者理解を深め、自分の考えを形成する授業展開を目指してきた。

① 自分事としてとらえる発問の工夫



(※山田教授の講義資料から)

郷土愛で偉人や感動教材を扱った資料では、中心発問や深化発問に工夫が必要となる。

ア 中心発問 →主人公を中心に

「すごさ」「苦悩」を分析するような発問を繰り返すことで価値理解を深めることが有効である。

発問例としては、

- ★この感動はどこから生まれてくるものだろうか。
- ★なぜ、この場面で感動を覚える(すごい)のだろうか。
- ★主人公のこの行動のどこに感動があるのだろうか。

イ 深化発問 → 自分自身を中心に、主人公と自分自身の比較をする。(人間理解)

今までの自分の考え方との相違点(ズレ)を見つけた時こそが成長のチャンスである。

深化発問では、このズレが児童生徒の中に現れたとき、心の揺さぶりになる。

山田教授の読み物資料「伝えるということ」(教育出版中学2年道徳)を用いた示範授業では、中心発問で主人公の「すごさ」を分析したのち、児童生徒への事前アンケートの結果から、地域の文化についてあまり興味のない自分たちの実態があらわになった。「郷土に対する思いを主人公が100%だとすると、自分たちは何%だと思うのか」と心の揺さぶりをかけた問いとなった。児童生徒は、上辺だけの意見交換ではなく、本音も多く見られ、深く踏み込んだ授業展開となった。さらに、中学校では「どうしたら主人公のようになれるのか」という解決を図る発問も出され、自分事として考えることができていた。

②「対話」を活発にする工夫について

道徳の授業は、「対話」や「議論」することがベースとなる。対話的な学びには、①子ども同士の協同、②授業者との対話、③先哲の考え方を手掛かりに考える等を通じ、自己の考えを広げ深めることの実現が求められる。そのためには、学級経営の土台ができていないことが前提となり、相手の話を聴く(傾聴)ことは重要なスキルとなる。

ア 学級の座席配置

教室での座席配置は、「コの字型」での指導が有効である。岩見沢小学校の提案授業は、「コの字型」で児童がペアやグループで話しやすい隊形で行った。また、山田教授の示範授業でも、小中学校どちらの場合も、子どもたちは隣の机同士を必ず付けていた。教師の通路を丁の字で空け、2列で座わることで、子どもは、お互いに顔が見え、隣との距離も近いため、対話しやすい雰囲気が生まれていた。



この座席は、ペアだけではなく、グループも作りやすいことから、子どもが主体的に活動しやすい場作りとなる。また、子どもと教師の間も、通路以外の距離を取り払うことで、議論しやすく、教師が自分に向かって問いかけているような気持ちになる効果も生まれているようだった。

イ ペア、グループでの対話

前述の通り、「コの字型」からペアやグループを簡単に作り出すことができる。ペアでの話し合いは、前後よりも、隣の人と話す方が話し合いに深まりが見られた。気軽に話し合うにはペアがよく、話し合いをより深めたい場合（自分たちで問いをつくるなど）は、4人のグループでの話し合いが有効である。

ウ 全体からの考えの集約、教師の対話

多くの子どもから考えを聞くための道具として、コミュニティボールがある。ボールを手にした子どもは自分の考えを発表し、次の人へと渡していく。教師が黒板に子どもの意見をまとめるときなど、指名なしで子どもが次々と考えを述べていくので、全てのペアや個人の意見を吸い上げたいときに有効であった。9月に行われた齊藤教諭の授業でも使われ、短い時間で効率よく多くの考えを聞くことができた。

エ 受容と問い返し

子どもが安心して発言するためには、傾聴の姿勢が大切である。スキルとしては、教師が相手の発言をオウム返して繰り返すことが有効である。子ども同士の対話でもスキルを身に付けさせる必要がある。また、オープンクエスチョンによる「切り返し」「問い返し」で議論を深めていくことも有効である。

③ 板書の工夫について

多様な考え方の交流をさせるための支援ツールとして、板書の工夫が必要である。

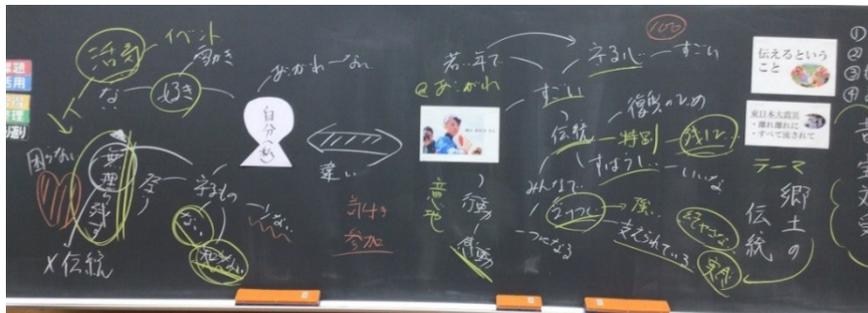
ア 時系列的な板書

共感的に場面ごとに主人公などの気持ちや考えを問う発問をするのに適している。

イ 構造的な板書

- ・登場人物の関係を中心にした板書
- ・子ども自身の考え方の違いを明確にした板書

子どもの考えを分類、比較、関連付けしやすくなる。右の写真は、山田教授の示範授業の板書である。主人公の素晴らしさと子どもの自分自身の心の弱さを比較している。



④ ICTの活用について

多面的・多角的に考えたり、自分自身との関わりの中で考えを深めたりするなど、場面に応じたICTの活用を進めてきた。

ア 心の数直線の利用

「心の数直線」は、子どもたちの思考の振れ幅を数値によって視覚化することが可能と

なるため、それぞれの考えを視覚的に捉えやすく、大きな効果をもたらす。

紙でできている心情円盤も同じ役割を果たすが、「心の数直線」はタブレットで簡単に視覚化した表示ができ、数値化されているので、わかりやすい。生徒の心の揺れ具合や理由を問うと、建前ではなく本音が見える授業となる。山田教授の授業でも、多く活用されている。



「心の数直線」は、以下の URL からアクセスすることができる。(出典：熊本市教育センター)

URL→<http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/kyouzai/web/Heart-meter3/>

イ スプレッドシートの利用

事前アンケートとして、事前読みをした読み物教材の感想をスプレッドシートにまとめると、全員の意見を子どもが簡単に目にすることができ、時間の短縮を図ることができる。

ウ YouTube 動画の利用

地域素材を教材化するため、前述の通り、インタビュー動画を作成した。山田教授から、読み物教材だけでは子どもへ「人の思いが伝わる」ことが弱いため、簡単に検索できる動画があると伺った。検索をかけると、ニュース番組などで取りあげられている動画が簡単に見つかり、視覚として訴えることができ、有効であることがわかった。

⑤ 子どもが自ら問いを考える授業

山田教授が岩見沢小学校6年生で児童が自ら問いを考える示範授業を行った。児童たちは、読み物の感想を共有することで、登場人物の横山さんの素晴らしさ(価値理解)をしっかりと捉えていたため、自分たちで深化発問を設定することができた。与えられた問いよりも、自分たちで生み出した問いの方が、自分事として考えやすい。また、深化発問では、道徳性の高い主人公へのすごさと、自分たちの関心の少なさが対比され、なぜ主人公のようになれないのかを考え、自分の心の中の弱さ(人間理解)にしっかりと向き合うことができていた。



(3) 子どもの変容を見取る評価の在り方

道徳科の評価は、内容項目についてどのくらい理解したかということの評価するものではない。道徳的諸価値について、主観的な考えから多面的・多角的に考えることができるようになったか、道徳的諸価値を自分自身との関わりで深めようとしていたかといった道徳性の成長を見取るものである。

授業の終末で行う「振り返り」は、子どもたちの納得解が表れるところであり、本時で扱った道徳的諸価値にどの程度自分事として迫ることができたかを捉える指標になる。

①振り返りの視点

山田教授は、示範授業の中で、振り返りを書く際の「視点」を児童生徒へ提示していた。「新しく知ったこと」「これからの自分はどのように考えるか。」「まだモヤモヤしていること(どうしたらいいか、こまっていること)」「自分の弱さ」「友達の考えからわかったこと」の5点である。特に、郷土愛で授業を行う場合、「まだモヤモヤしていること」や「自分の弱さ」が出てくるのが有効であると感じた。

②振り返りの実際

東光中で行われた示範授業での生徒の振り返りを紹介する。

- ・自分は岩見沢について何となく知っていると思っていたけれど、実際は文化や伝統についてほぼ知らないことに気づいた。祭りやイベントに参加してみるという意見が出たが、勇気がいるし、どこから参加したらよいか知らないから、1から学びなおす。

・伝統は地域において人をつなぐ大事な要素だと知れたけど、岩見沢の伝統というものについてまだわからなかったことばかりだったので、まずは自分で体験したり、知りに行くことが大事なのかなと思った。〇〇さんの考えがユニークで面白かった。

6 研究主体校・協力校との連動

(1) 具体的な活動

今回研究所の道徳部会の研究主体校の3校では、東光中学校区の小中連携研修との連携を行い、「3校をつなぐ会」の道徳部会の協力を得ながら研究を推進してきた。4月から「つなぐ会」の道徳部会を3回行い、具体的な手立てや検証方法、公開授業の在り方等について協議を重ね、立案、実施してきた。

東光中学校では、7月に公開研究授業を行った際に、全職員で授業を参観、講演にも出席するなど研修体制を整えることができた。また、公開研究授業を行うにあたっては、部会をはじめ協力校からも助言をいただき、校区全体での支援体制のもと、取り組むことができた。

また、東小学校では、9月に齊藤久子教諭による研究授業を行った。部会で作成した指導案を基に、他学級の担任がプレ授業を行い、児童の反応をみて改善するなどの協力を得た。

12月には岩見沢小学校での公開研究会に3校全職員が参加し、研修を実施した。講師の山田教授には、前日に東光中3年生、東小6年生を対象とした示範授業、東光中学校区の教員を対象とした講演会を行っていただいた。また、公開研究会当日には、公開に先立ち、岩見沢小学校低学年、高学年の道徳の授業の参観、6年生の示範授業も行っていた。研究協議では、公開研究授業に対する助言、参加者を対象とした『うれしい！楽しい！道徳大好き～「考え、議論する道徳」への実装～』と題する講義を行っていただいた。郷土愛の価値項目での授業の組み立て方や多面的・多角的な考えを促す発問作り、役割演技の効果的な活用方法など幅広く説明いただき、参加者にとって、明日からの授業改善につながる講義内容となった。

7 成果と課題

(1) 成果

○郷土愛の価値項目において、地域題材を教材化するにあたってのポイントは、伝統文化をつないできた人の思いであることがわかった。そして、地域に根差した題材の教材開発が東小に1つ、岩見沢小に1つできた。

○総合的な学習の時間の単元の中の1時間として関連付け、組み込む道徳の授業を行うことができた。

○振り返りの視点を明示することで、子どもの道徳的成長を捉える評価方法の有効性が明確になった。

(2) 課題

●郷土愛の内容項目で授業を行う際の教材研究と発問の取り上げ方に課題がある。北海道は開拓150年と歴史が浅く、地域の伝統文化を残していきたいという風土が培われづらい土地柄もあるかもしれない。だからこそ中心発問で主人公の価値の高さ（価値理解）に十分ふれたあとで、深化発問では、自分の中の弱さ（人間理解）をはっきりと認識し、比較することで、心の揺さぶりが生まれ、郷土愛への本音が生まれ、どうしたら価値に近づけるのかを考えることができる深い学びとなることがわかった。深化発問の作り方について、より研究を進める必要がある。

●作成した地域題材を岩見沢市内全体へとつなげていくことに課題を感じている。それぞれの学校で身近な題材を、一般化するためには、検討の余地がある。

8 担当

部長：山崎 慶子（東光中学校）

部員：齋藤 久子（東 小学校）

村上 捷太（幌向小学校）

茂古沼 佳奈（岩見沢小学校）

浦瀧 直人（豊 中学校）

「外国語」研究部会

1 部会テーマ

外国や外国語への関心をもち、積極的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする、「英語が使える岩見沢の子ども」の育成

2 研究目的

- (1) 外国語活動および外国語科における指導方法の工夫・改善
- (2) 主体的に外国語を学ぶ子どもの育成
(小3～中3までの「学びの連続性や系統性」の整理・充実を通して)
- (3) 外国語活動および外国語科における小中の連携・接続の充実

3 テーマを具現化するための研究の視点

- (1) 小3から中3までの「学びの連続性や系統性」の整理・充実
- (2) 相手意識や目的意識をもった、「必然性のある言語活動」の在り方
- (3) 「理解と表現」の充実をめざす ICT の活用

4 研究年次

令和6年度～令和7年度（2年研究の2年次）

5 研究実践の具体

- (1) 視点1 小3から中3までの「学びの連続性や系統性」の整理・充実
～中学校段階への学びの連続性を保障する

中学校外国語科が、小学校段階での学びが前提とされているところから始まり、小中間のギャップが指摘されていた。具体的には小学校課程での各単元で学ぶ基本的な表現（フレーズ）を習得するためのガイドや手立ての少なさと、中学校での学習の土台とされる基本的な言い回しに必要とされる600～700語を身につけるための手立てが課題としてあげられる。

今年度は単元ごとの「表現・フレーズ」と「意味リスト」の一覧、および、音声データの作成、教科書巻末の単語について「書く」練習用PDFを作成し、ロイロノートでの市内小中学校への配布を行う。

参照先：【ロイロノート→資料箱→北海道岩見沢市共有→

外国語の学習サポート→これでバッチリ！小学校英語】

外国語活動と外国語科では活動から教科へ、目標の中心は「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」から「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」へ、さらに、小学校から中学校へは、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」から、「簡単な情報や考えを理解したり表現したりするコミュニケーションを図る資質・能力」へとつながる。小



小学校3年生から外国語活動が始まり、5年生から外国語となる現在では、各々の段階における、緩やかで無理のない連続性を見つけ出すことが課題となる。

本研究では、これらの課題解決のため、小・中学校、及び義務教育学校の教員が、これまでの乗り入れ授業や教科担任、授業づくりの経験を生かし、また、言語活動を中心とした教科の特性に基づく授業を共に創りながら「授業づくりの共通理解」へつながる実践研究を行った。

(2) 視点2 相手意識や目的意識をもった「必然性のある言語活動」の在り方

～各単元末でのパフォーマンス課題に加え、話すこと（やり取り）の発展的充実をめざす（即興的な会話、スピーチ、プレゼンの設定）

本研究では、「英語が使える」ということを「即興的な会話ができること」「スピーチなどができるところ」に焦点化し、日常的に英語を使ったコミュニケーションができるよう「場面を設定したロールプレイ」「英語でペアワークやグループディスカッション」「ALT との交流」「プロジェクト的な学習によるスピーチ」など、必然性のある言語活動を設定し、目的意識や相手意識を伴ったコミュニケーションを図ることとした。



(3) 視点3 「理解と表現」の充実をめざす ICT の活用

～ICT の効果的な活用による指導内容・指導方法の充実

児童生徒が主体性をもって学習するために ICT の活用は重要である。

特に授業においては、指導事項をスライドにしたり、言語活動を音声化したりするなど、児童生徒が自ら学べるよう工夫している。

また、児童がフォニクス（Phonics：文字と音の規則性を学ぶ方法）や単元でよく使う表現を繰り返し練習するとき、あるいは英語の歌で単語や表現を身につける際にも楽しく学べることから、活用されている。

6 研究主体校・協力校における連動

(1) 研究授業（協力校）

研究協力校である北村小学校において、主に視点2にかかわり研究授業を実施した。

北村小学校は北村中学校との小中一貫教育の取組を進めており、複数の教科で中学校教諭による小学校への乗り入れ授業を実施し、指導の一貫性を図っている。

今年度は中学校の英語科教員による乗り入れ授業、英語科時間講師による外国語及び外国語活動、さらに英語科免許を持つ担任による外国語活動など、専門性を生かした活動や授業が展開されている。

また、校内研修も小中で共有されており、研究主題を「9年間を見通した“自立した学習者”を育てる授業の創造」とし、“自立した学習者を育てる”という共通のゴールを明確に持ちつつ、ゴールへ向けたアプローチは教師一人一人が設定し、教科の特性や児童生徒の実態に応じた指導方法を探求・共有しながら授業改善を目指している。

北村小学校 9月25日（木）

・第5学年

・授業者 教諭 横山 麻由子

【単元】Lesson5 I can run fast

ALT James Retting

（教育出版 ONE WORLD Smiles5）

【目標】できることを相手に伝えることができる。

① 研究の視点

ア 相手意識や目的意識をもった「必然性のある言語活動」

イ 学びの連続性や系統性の充実

ウ 帯時間での英会話と自己選択する個別学習の設定

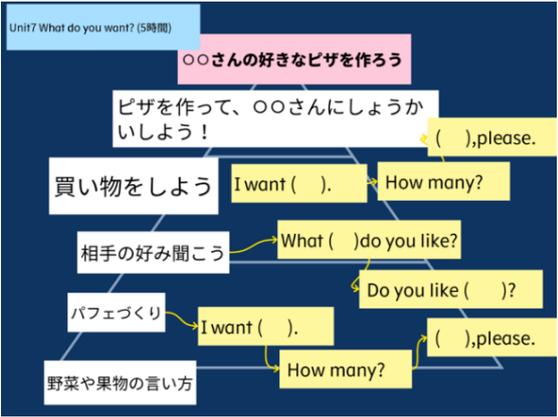
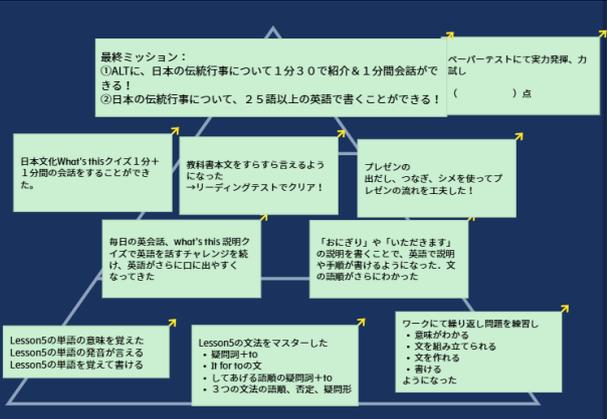
エ 学びの地図による単元の見通しと本時のゴール、振り返りの充実

② 授業実践から学ぶ

ア 「必然性のある言語活動」

・面接試験で、面接官役のALTに自分にできることを伝え、仕事へつながる擬似体験

【学びの文脈を意識した単元構想」と「ラーニング・マウンテン」】

<p>4年 外国語活動 授業者 佐藤 直史</p>	<p>8年 外国語 授業者 西藤 秀美</p>
<p>Unit 7 What do you want? (文部科学省 Let's try 2)</p>	<p>Lesson 5 How to Celebrate Halloween (教育出版 ONE WORLD 2)</p>
<p>単元のゴール ○相手の好みのピザをつくろう！</p>	<p>単元のゴール ①ALTのセスに日本の伝統行事について1分30秒で紹介し1分間会話をすることができる。 ②日本の伝統行事について、25語程度の英文を正確に書くことができる。</p>
<p>今日のゴール ○ピザの材料を買いに行こう！</p>  	<p>今日のゴール ○日本文化をwhat's this クイズ+1分間の会話をすることができる。</p>  

イ 個別・発展的な学びの実現

- ・帯時間の設定による、繰り返し学習

授業始まりの帯時間での継続的な英会話（やり取り）により、間違ってもかまわない、多少日本語が混じっても気にしない学習環境の中で、会話や英語の発話に慣れていく様

子が見られ、研究授業で課題となっていた、対話の量を確保する、テンポよく活動する授業が意識できた。

4年生外国語活動では、授業開始と同時に、教師との Classroom English を使ってのやり取りから始まり、本時で使う野菜や果物を表す単語の確認をペアで行い、動画を活用したフォニックスや表現の練習をテンポよく進めていた。

8年生外国語では、ペアでの単語と表現の確認、2つのテーマ（10月、北海道の冬）による英会話帯活動を、ペアを変えながらテンポよく活動が行われた。

・自己決定する個別学習の時間

授業の終わりの帯時間では、4年生外国語活動では「書く」課題を自分で選択して取り組む活動、8年生外国語では、「話す」「読む」「書く」から自分に必要な学習課題を選択して、取り組む様子を見ることができた。

ウ 理解と表現の充実をめざす ICT の活用

授業の始めに「学びの山（ラーニング・マウンテン）」を提示して、単元のゴールを確認し、これまでの学びを振り返り、本時の活動への導入に使われていた。また、指示や説明を視覚化する板書の機能、ノートやメモの替わり、単語帳や会話の材料など、タブレット等が書庫の役割も果たしている。

② 4年生外国語活動、8年生外国語の授業における「共通化された1単位時間の流れ」の設定

双方の授業において、単元のゴールと本時のゴールの確認、帯時間の扱いなど授業の主要な流れを共通して設定し、見通しを持ち、安心して学習に臨む学習環境づくりに努めた。

【今回の授業で共通化された1単位時間の流れ】

くささわ学舎 4年 外国語活動 学習構想案

令和 7年 10月 29日 (水) 授業者 佐藤 直史

8年 外国語 10月 29日(水) 3年 A組 指導者 西藤 秀美

【単元最終目標前の段階練習】
日本文化 What's this クイズ1分+1分間の会話をすることができる

【単元最終目標前の段階練習】
日本文化 What's this クイズ1分+1分間の会話をすることができる

本時の目標 ○客役は、I want～.や Five please? のような表現を、店員役は、How many ?や Here you are.などの表現を用いて、2 往復以上の会話を続けることができる。(思・判・表)

過程	時間	学習活動	教師のかかわり
帯活動①	5	1 あいさつ ペアで簡単な英会話 フォニックスソング	
帯活動②	5	2 単語チェック ・日本語を聞いて、英語を言う。 ・英語を聞いて、日本語を言う。	イラスト付きの食材シートをペアに配る。
課題解決 学習活動	30	3 ピザの材料を買いに行く。 ・やりとりするために、どんな表現だったかを確認し、 アと練習する。 →班の中で、店員役と客役に分かれ、買い物問: 〈買い方〉 ① 店員:What do you want? ② 客:I want carrots. ③ 店員:How many? ④ 客:four please. ⑤ 店員:Here you are.(食材カードを渡す.) ①～⑤を繰り返す。 ※12分ずつで交代。	イラスト付きの食材シートをペアに配る。
帯活動③	10	5 振り返りとライティング ・スプレッドシートに振り返りをする。 ・振り返りが終わったら、自分でライティングを行う。 (アルファベット)	【振り返りの視点】 ① 学習内容 ② 学習態度 ③ コメント
評価		○客役は、I want～.や Five please?のような表現を、店員役は、How many ?や Here you are.などの表現を用いて、2 往復以上の会話を続けることができた。(思・判・表)	

パターン化 見通し

人間関係

安心して 発言できる

なめらか ほかほか

学びの足場 教材準備

単元のゴール
本時のゴール

帯活動

個別発展
タイム

振り返り

既習の表現と、疑問 to, It for to の表現を使って、1分間の説明ができる。(表5)
・会話メモを見て相手に伝わりやすいように表現しようとしている。(場)
Hello. I'm ~. May I have time to try quiz and talk? などのあいさつから始めるよう促す。

・5～9年を通した学習
・学年や単元のベースに重点を置いた学習
・5～9年を超えた内容の学習(英検、日記、英文読書、洋楽歌詞調べ、英文記事、英会話など)
・WRSLの技能に重点を置いた学習を、それぞれが選んで行う。

・ヘッドホン、資料箱など自由に使用するのは、英会話練習は誘いあって行う。
・メディア、図書室、学習可能。

・本日の振り返りと最終ミッションに向けて、プレゼンシートに記入する
・文法習得、プレゼンの工夫、会話の工夫について振り返るよう指示する

7 成果と課題

(1) 成果

視点1 小3から中3までの「学びの連続性や系統性」の整理・充実

主体的に外国語を学ぶ子どもの育成を目的の一つとして研究を進めてきた。言語活動は言葉を「聞く」ことから、「話す」、「読む」、「書く」へと段階的、螺旋的に豊かに広がる。学びの連続性や系統性を整えること、具体例として、言語活動をスモールステップで段階を踏み、身近な言葉の習得から始まり、自分にできることから仕事へ、そして、日本の文化を紹介するに至るといった学びの連続性を3本の授業実践から、主体的に学ぶ姿を見ることができた。

学びの連続性、特に小6と中1の間のギャップをどうするかが課題であり、今年度の取組の中で、小学5・6年で身につける表現・フレーズを一覧にし、ALTの力を借り音声データ化できたことは成果と言える。学びの連続性は、学年間・小中校種間だけではなく、児童生徒一人一人の中にもあり、個別学習の時間や帯時間での選択課題は、一人一人の学びの連続性を保障する手立ての一つといえるのではないだろうか。

視点2 相手意識や目的意識をもった「必然性のある言語活動」の在り方

指導方法の工夫・授業改善においては、相手意識や目的意識を持った「必然性のある言語活動」をすることで、教師の役割は「場の設定」へと変わる。子どもたちは明確なゴールがわかり、そこに至るまでの見通しを持つことができる。

1 単位時間の授業の流れをパターン化することは、子どもたちが見通しを持ち、安心して学習活動に取り組める環境を整えることにつながる。外国語活動・外国語に限らず、他教科でも「必然性のある学習活動」やパターン化した授業の流れは生かせるのではないだろうか。

視点3 「理解と表現」の充実をめざすICTの活用

ICTは授業改善に欠かせないツールとなっている。特に外国語活動では、1時間に複数の動画を使いながら、言葉の理解を助ける手立てとして有効であり、音声表現を身につける重要なツールとなっている。また、活動を促す指示や説明を表示する、基本的な表現を提示するなど、聴覚に加え、視覚情報があることで、より学びやすくなる子どもたちもいる。

【小・中の連携・接続について】

今年度の外国語部会の役割の一つに、小・中の連携・接続の充実がある。北村小・中では“自立した学習者を育てる”という共通のゴールを明確に持ち、校内研修が進められており、くりさわ学舎では対話のある校内研修を進め、相互理解を図りながら授業改善を進めてきた。北村小・中とくりさわ学舎に共通していることは、中学英語を経験している指導者が小学校の外国語を担当しており、中学校までに必要な学びを見通していることが大きな強みとなっている。

(2) 課題

授業を通した子どもの姿から「主体的に学ぶ」「指導方法の工夫、授業改善」等について、研究・実践し、成果は得られたが、客観的なデータをもとにした検証を行うことができなかった。今後は、授業後の振り返りの積み重ねや指導と評価が一体となった振り返りの充実など、学びの見取り方についても、学んでいく必要がある。

研究協議の中で、子どもたちの「人間関係」や「安心して発言できる」「ほがらかさ」「学びの足場」等、学びの場づくり、関わり方が話題になった。岩見沢市で取り組む岩見沢型ピア・サポートの考え方に基づく授業づくりやトライ&エラーがしやすい安全・安心な環境づくりを行うための、情報共有と共通理解が今後ますます必要となってくる。

8 担当

部長：石川 亜紀（くりさわ学舎）

部員：宮本 将輝（北村小学校） 高嶋裕美子（北村中学校）

「情報教育」研究部会

1 部会テーマ

「ICTの積極的な活用を通して情報活用能力の伸長を図る授業の推進」

2 研究目的

- (1) 個々の学びの実現に向けた有効なICTの活用方法を明らかにする
- (2) 情報活用能力を育むための学習活動のあり方を研究提案する
- (3) ICTを活用し、学校現場における校務を軽減する

3 テーマを具現化するための研究の視点

- (1) ICT活用による児童生徒の情報活用能力の育成（授業改善）
- (2) 生成AI等を活用した学習活動の在り方
- (3) 基礎学力の定着を目指したAIドリル等の活用
- (4) ICTを活用した学校現場における校務の軽減

4 研究年次

令和6年度～令和7年度（2年研究の2年次）

5 研究実践の具体

(1) 児童生徒の情報活用能力育成に向けた実態調査と育成に向けた取組

① 実態調査に基づく課題の明確化

昨年度実施した情報活用能力診断ツール「ジョーカツ」の結果より、研究指定校（第二小・上幌向中）では「課題設定（問題発見）」と「整理・分析」の能力が課題であることが判明した。受動的な学習から脱却し、自ら問いを立て情報を構造的に処理する力の育成が急務であった。今年度は、課題の見られた能力を育成するため、昨年度からの継続した取組として「問題発見・解決型（探究型）」の授業スタイルをさらに推進した。具体的には、児童生徒が自ら「問い」を見つける単元デザインの工夫や、情報を整理・分析するための「思考ツール（シンキングツール）」の活用を各教科で展開した。

② 探究的な学びと「思考ツール」の導入

今年度も「問題発見・解決型（探究型）」授業への転換を図り、児童生徒が自ら「問い」を見つける単元デザインや、情報を整理・分析するための「思考ツール」の活用を推進した。9月には専門家（瀬戸 SOLAN 学園副校長）を招いた研修を行い、教員が思考ツールを思考の「スキル」として指導できる体制を整えた。



③ 成果と課題

ア 成果

思考ツールの活用により、考えを可視化・整理する場面が増加した。「問い」を重視したことで、学習を自分事として捉え、主体的に取り組む児童生徒の姿が見られるようになった。

イ 課題

思考ツールの活用自体が目的化しないよう、思考の局面に応じて適切なツールを児童生徒自身が選択できるレベルへの習熟が必要である。

(2) 生成 AI 等を効果的に活用した学習活動の検証と提案

① 学習のパートナーとしての活用深化

昨年度の「使い方を学ぶ段階」を経て、今年度は生成 AI を「思考のパートナー」として位置づけた。中学校外国語科では AI との英会話で言語活動量を増やし、保健体育科（ダンス）では AI をコーチとして活用し、共に創作する活動を行った。保健体育科の研究授業分析では、AI との対話を通して、生徒が「答えを教えてください」姿勢から「まず自分でやってみる」という能動的な姿勢へ変容したことが確認された。



② 成果と課題

ア 成果

AI という「壁打ち相手」を得たことで課題解決へのハードルが下がり、個別最適な学びや協働的な学びが深まった。

イ 課題

情報の真偽を見分けるファクトチェックの習慣化や、AI との適切な距離感を保つためのマインドセット（情報モラル）の育成の継続が必要である。

【分析】導入 1年目と2年目の質的な違い

1年次 : バasketボール	2年次 : ダンス
多くの生徒は生成AIの使用に慎重な姿勢を示した。生成AIの活用に慎重となった背景は、ルールを作る際に問題点ばかりに注意を向けてしまったためである。	多くの生徒が生成AIを活用して振り付けのアイデアを出した。壁打ち練習を通じて生成AIとの自然な対話が促進された。また、AIのサポートだけでなく、実際に踊りながら細かく動きを調整することも重視された。

生徒たちは1単位時間の中で生成AIの回答を求めるだけでなく、時間を有効に使い、身体を動かさず必要性にも気づいた。

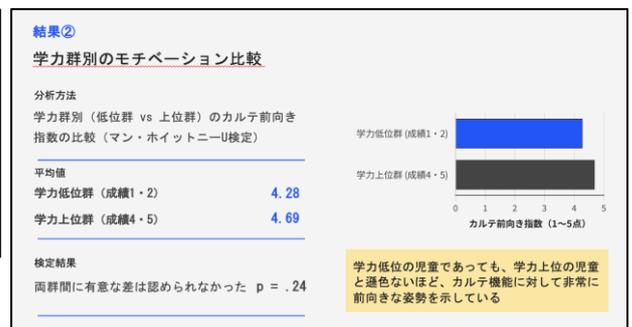
(3) AI ドリル等を活用した研究授業の実施とその姿の検証

① 「テストパーク」によるプレテストの活用と業務改善

第二小・上幌向中では、AIドリル（テストパーク）を単元末の「プレテスト」として活用した。即時採点機能を活かして直後に復習時間を設けることで、本テストの正答率が向上した。また、教員の採点業務を5教科で約 20 時間削減し、その時間を個別指導等に充てることができた。

② 学習意欲への影響と「カルテ機能」の分析

3校（第一小・北真小・緑中）のアンケート調査比較から、小学生は「ポイント」等のゲーミフィケーションが、中学生は「テスト対策」等の実利性が意欲の源泉となる傾向が見られた。また、第一小における「カルテ機能」の分析では、学習プロセス（努力量）が可視化されることで、学力低位児童においても上位層と遜色ない高い学習モチベーションが維持されることが実証された。



③ 成果と課題

ア 成果

校種による学習意欲の源泉の違い（小：ゲーム性、中：実用性）が明らかになった。また、学習過程の可視化機能は、学力層に関わらず高い意欲を維持させる効果があることが実証された。

イ 課題

校種や学習段階に応じた活用方法の整理と教員の ICT 活用を支える体制整備が必要である。

(4) 教職員の ICT 機器等の活用能力向上に向けた研修会の実施

① 夏季・冬季研修講座の実施

夏季研修講座では「Google Sites」による校務 DX や、「Canva」を活用した教材作成など、実務に直結する実技研修を実施し、ICT 活用の心理的ハードルを下げた。冬季研修講座では「生成 AI」の業務活用（授業案作成や面談日程調整など）に焦点を当て、具体的かつ即効性のある業務効率化の手法を共有した。

② 成果と課題

ア 成果

「明日から使える」実践的な内容としたことで参加者の満足度が高く、ICT 活用への心理的ハードルを下げることに繋がった。

イ 課題

教職員間のスキル差に対応するため、習熟度別コースの設定や OJT による継続的なサポート体制の構築が求められる。

6 研究主体校・協力校との連動

(1) 公開研究会

令和7年11月10日、研究指定校である岩見沢市立第二小学校・上幌向中学校において公開研究会を開催した。「ICT の積極的な活用を通して情報活用能力の伸長を図る授業の推進」をテーマに、以下の授業を公開した。

① 小学校4年 社会科「自然災害からくらしを守る」

地域防災をテーマに、デジタル社会科副読本やインターネットを活用して情報を収集・分析し、啓発ポスターを作成する探究的な学習を展開した。

② 小学校5年 社会科「工業生産を支える運輸と貿易」

貿易の役割について、生成 AI を活用して不足情報を補いながら多角的に考察する授業を行った。

③ 中学校1年 外国語科「Lunch in Chinatown」

生成 AI を活用して架空の対話相手を設定し、必然性のある場面の中で英語でのコミュニケーション能力を高める授業を公開した。

④ 講演会

講師には鳴門教育大学の藤村裕一教授を招き、「情報教育の捉え方とその必要性」について講演をいただいた。藤村教授からは、ICT を単なる「便利な道具」ととどめず、「思考を深めるための手段」として位置づける重要性について指導・助言を得た。

⑤ 成果と課題

ア 成果

ICT が単なる調べものに留まらず、自分の考えを整理・表現し（思考・表現）、即座に仲間と共有する（情報共有）ための効果的なツールとして意図的に活用され、学びの活性化と深化に繋がった。

イ 課題

ICT の活用が目的化しないよう常に授業のねらいに立ち返る必要と、操作スキルの個人差が学びの障壁とならないような支援の在り方が挙げられる。さらに、今後は「1人1台」に留まらず、協働的な学びを促進するための新たな活用法を探究していくことが期待される。



7 成果と課題

(1) 成果

① 「思考ツール」と「問い」による情報活用能力の育成

実態調査で課題となっていた「課題設定」と「整理・分析」の能力を育成するため、探究的な学習過程において「思考ツール」を効果的に導入した。思考ツールを単なる作業用紙ではなく、思考を可視化・構造化するための「武器」として位置づけたことで、児童生徒が自ら情報を整理し、新たな「問い」を見いだす姿が増加した。これは、本部会が目指す「ICTの活用を通じた情報活用能力の伸長」を具現化するものである。

② 生成AIの「パートナー化」による個々の学びの深化

生成AIの活用は、操作習得の段階を超え、教科の目標達成のための「思考のパートナー」としての活用へと深化した。特に保健体育科や外国語科の実践では、AIを「コーチ」や「対話相手」として位置づけることで、生徒が受動的な姿勢から脱却し、自律的に課題解決に向かう姿（自己調整学習）が見られた。これは、ICTが個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を支える強力なツールとなることを実証している。

③ AIドリル活用による「基礎学力の定着」と「校務軽減」の両立

AIドリル（テストパーク、ミライシード）の導入により、アダプティブ・ラーニング（個に応じた学習）が促進され、基礎学力の定着に成果を上げた。特筆すべきは、「カルテ機能」の分析により、学習のプロセス（努力量）が可視化されることが、学力低位層の児童に対しても自己効力感を高め、高い学習意欲を維持させる効果があることが明らかになった点である。また、自動採点機能の活用は、教員の採点業務を大幅に削減（年間換算で数十時間規模）し、創出された時間を児童生徒への指導や対話に充てることを可能にした。これは「ICTを活用した校務の軽減」という目的を達成する具体的なモデルケースとなった。

(2) 課題

① 探究の質を高める教師のファシリテーション能力

思考ツールや生成AIといったICT機器はあくまで手段である。これらを活用して、児童生徒の思考をさらに揺さぶり、表面的な調べ学習に留まらない「深い学び」へと導くためには、児童生徒の資質・能力を育む教師の発問やファシリテーション能力の向上が不可欠である。

② プロセスを評価する新たな手法の確立

AIドリルのログや探究学習における思考の変容など、テストの点数（結果）には表れにくい「学習のプロセス」をどのように評価していくか、ルーブリックの作成を含めた評価手法の研究・開発が急務である。

③ ICT環境と運用ルール最適化

アンケート調査から「通信環境・動作の遅延」といった課題は、学習意欲を阻害する要因となり得る。デジタルとアナログ（紙媒体）の最適な使い分けや、発達段階に応じたログイン方法の改善など、運用面でのきめ細かな調整が求められる。

8 担当

部長：平尾 陸（上幌向中学校）

部員：黒坂 俊介（第二小学校） 今 雅彦（第一小学校） 上原 千鶴（北真小学校）

柴田 諒（緑中学校）

「岩見沢型ピア・サポート」特別研究部会

1 部会テーマ

他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子どもの育成
～岩見沢型ピア・サポートの実践を通して～

2 研究目的

- (1) 「岩見沢型ピア・サポート研修」の内容を市内に還流する
- (2) 研修を受けて実践したことを交流し、発信する
- (3) 児童生徒の変容を捉える方法を検証する

3 テーマを具現化するための研究の視点

- (1) 岩見沢型ピア・サポートに関する資料の整理及び実践収集・情報提供
- (2) 岩見沢型ピア・サポート実践の指導
- (3) 岩見沢型ピア・サポートの教育的効果についての研究

4 研究年次

令和7年度～令和8年度（2年研究の1年次）

5 研究実践の具体

(1) 岩見沢型ピア・サポートについて

- ① 岩見沢型ピア・サポートとは
事業報告に先立って、「岩見沢型ピア・サポート」とは何かを整理しておく。

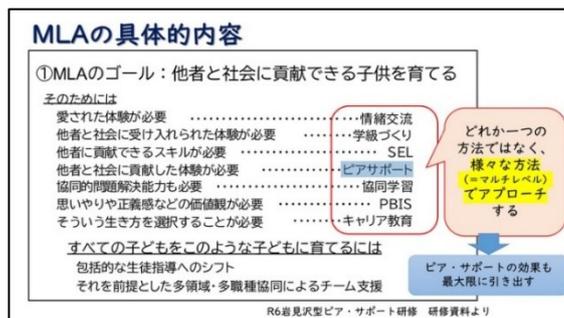
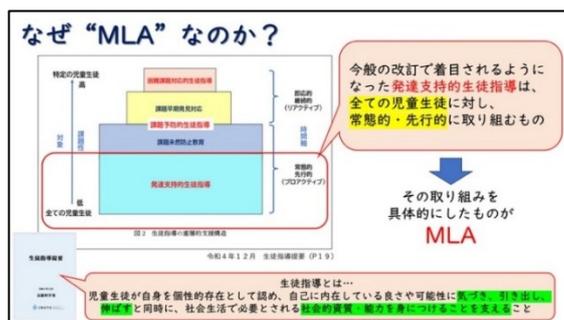
今般の生徒指導提要の改訂で、生徒指導は問題が起こる前に、常態的・先行的に行うべきであることが強調された。その取組を具体化したものが、日本版包括的生徒指導（マルチレベルアプローチ、MLA）である。

MLAは、生徒指導提要の改訂に携わった、広島大学名誉教授の栗原慎二氏が提唱している生徒指導方法である。これは、ピア・サポートだけではなく、多層的に様々な効果の異なる活動を組み合わせて指導することで全人的な発達を促すことをねらいとしている。

なお、岩見沢市では平成25年度から取り組んできたピア・サポートを発展させ、教師がMLAの理論を用いて児童生徒に身に付けさせたスキルを学習活動の場面で生かすことによる、安心して学ぶ学習集団づくりをねらいとして「岩見沢型ピア・サポート」としている。

〈参考文献〉

栗原慎二（2017）「マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり」ほんの森出版



② 各校の岩見沢型ピア・サポートの実践状況（令和7年5月）

本部会は、市教委が令和6年度から3年計画で推進している「岩見沢市ピア・サポート研修～『子どもたちが安心して学ぶことができる学習集団づくり』を目指して～」での学びを、各校での実践につなげていくことを目的として立ち上げられた。各校の岩見沢型ピア・サポート推進担当教員をはじめ、市内の先生方が期待する活動ができるよう、5月に各校の担当者を対象としたアンケートを実施した。その結果、以下のような回答を得られた。

「岩見沢型ピア・サポート」特別研究部会アンケート		
実施期間：令和7年5月19日～5月30日 回答数：23名（回答校17校）		
主な実践内容	困っていること	部会に期待すること
<ul style="list-style-type: none"> ・朝ピア活動（週1回～毎日） ・全校、学年、異学年、小中連携でのピア・サポート ・学活や総合的な学習の時間を活用したピア・サポート ・SEL や PBIS との連携 ・研修の環流、生徒指導研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・他校の実践が見えない ・教職員間の共通理解 ・年間計画や実践資料作成 ・組織的、継続的な取組 ・実践や研修の時間確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・他校の実践例の共有、資料提供（データベース化） ・気軽に実践を交流、相談できる場 ・外部講師の活用や、研修の柔軟な開催 ・研修の環流（実践の例示）

市教委主催による研修が2年目を迎えたこともあり、回答いただいた全ての学校で実践が行われているものの、迷いや不安があったり、実践資料や実施時間の確保に課題が見られたりするという現状が明らかになった。

これらの実態を踏まえ、今年度は、特に希望が多かった「実践資料のデータ共有」と「研修内容の還流」を行うとともに、次年度に向けて「教育的効果の捉え方」について検証した。

(2) 岩見沢型ピア・サポートに関する資料の整理及び実践収集・情報提供

① ロイロノートを活用した実践資料のデータ共有

アンケートの中で「部会へ期待すること」に対し最も回答が多かったのが、「実践資料のデータ共有」である。

そこで、令和6年度に開設したロイロノート資料箱を活用して、部員7名が各所属校での取組を公開した。これにより、小・中学校で実際に使われた実践資料・研修資料が提供され、各校での実践の参考となっている。

5分間～50分間の実践資料や、校内研修で活用された資料が入っているので、ぜひご活用いただきたい。

ロイロノート→北海道岩見沢市「先生のみ」→研究所ピア部会

② Google サイトを活用した実践資料のデータ共有

ロイロノートによるデータ共有では、ファイル形式がPDFに限られることから、様々なファイル形式に対応することができるよう、Google サイトを活用した実践資料のデータ共有も開始した。

サイトは、本研究部会専用のGoogle アカウントを取得した上で、各部員がロイロノートとほぼ同様の資料を不定期で更新している。

岩見沢市で勤務する教職員のGoogle アカウントからのみ閲覧・ダウンロードすることができるようになっており、右の二次元コードが以下のURLからアクセスすることができる。

<https://sites.google.com/iwamizawa.ed.jp/iwamizawa-peersupport-mlashare>



なお、これらの資料等については、市内の学校の実践や情報共有を目的としていることから、転載等はお控えいただくとともに、岩見沢型ピア・サポート研修の講師である栗原慎二先生からも、無断複製・外部利用については固く禁じる旨の指示があったことについても了承の上、ご活用いただきたい。

(3) 岩見沢型ピア・サポート実践の指導

① 岩見沢市立教育研究所研究部会主催・運営の研修会の実施

11月4日(火)、8月に行われた岩見沢市ピア・サポート第Ⅱ期研修で扱われた内容の中から、対立解消(メディエーション)に焦点を当てて研究部会員が講師となり理論研修・実践演習を行った。研修を計画する際には、各校の担当者だけではなく、これまで市教委主催の研修を受けたことがない先生方にも参加していただけるよう、内容を工夫した。

理論研修では、対立が生じることは自然なことで、解消するためには双方の感情を言語化して相互理解を図る必要があり、その方法の一つとして「アルスの法則」が紹介された。実践演習では、演習シートに沿って参加者全員がメディエーションを体験した。

市内から50名ほどの先生方(うち半数は市教委主催の研修の参加経験なし)に参加いただき、事後アンケートでは、研修内容の満足度について95%を超える肯定的回答が得られた。



② 座談会

研修終了後、希望者16名による座談会を開催した。30分程度の時間ではあったが、アットホームな雰囲気の中での交流を通して、各校の実態の把握や、それぞれが抱える課題や悩みを解決する手がかりを得る場となった。

事後アンケートより

【理論研修・実践演習】

- 夏の研修で学んだときは非常に情報量が多かったので、今回のように短時間で、内容をしぼって整理できたのがとてもよかった。
- 対立解消の研修を受けた先生の指導をみて、児童の気持ちも大切にしつつ解決に導いていた姿にとっても感銘を受けたので、実際に研修を受けることができて良かった。同時に対立解消の難しさも実感することができた。
- 3人組で対応する事例は、先生の係により対応が違い、対応の仕方でも児童生徒の問題解決が異なってくることも経験できたので、もっとピア・サポートを学び、深めていくことが大切だと実感した。
- 自分と意見が違って相手の話を聞くことができる子ども、自分の非を認めて反省できる子どもに育てることが大切だと思った。次の日の朝、トラブルがあり早速実践してみたところうまくいった。

【座談会】

- 他校の取り組み状況等の情報交換ができ、本校が今後、何から始めていけばよいか、どう足場を組んでいけばよいか等について、たくさんのヒントを得ることができた。
- ひたすら悩みを聞いていただき、少しもやがとれた感じがする。
- 他校の様子を知れて有意義な時間となった。もっとたくさんの先生から話を聞けるとよいと思った。

(4) 岩見沢型ピア・サポートの教育的効果についての研究

岩見沢型ピア・サポートの実践を通して期待する教育的効果をもたらすためには、児童生徒の実態調査（アセスメント）に基づき、実践内容や方法を工夫して行うことが重要である。また、取組を推進していく上でも、定期的なアセスメントを通して児童生徒の変容を捉えることが、実践の成果や改善点を明確にすることとなり、より教育的効果の高い実践へとつながっていく。このように、岩見沢型ピア・サポートの実践には、児童生徒のアセスメントが極めて重要であることから、その方法について検証した。

今年度、部員の所属校で行われた方法と内容は次の5つである。

① hyper Q・U（学校生活満足度調査）

本調査については、各校が市教委から助成を受けていることから、年1～2回の実施を経て、北翔大学学長の山谷敬三郎氏に分析を依頼し、各学校ごと指導・助言を受け、よりよい学校生活に向けた取組の改善と推進を図っている。

② アセス（学校環境適応感尺度）

昨年度は市内全校でweb版の試験的運用が行われたが、今年度は、2校において書籍購入により利用できるダウンロード版を活用し、5月、10月、2月の計3回実施している。



①②の詳細についてはこちらを参照いただきたい

③ いじめアンケート

以下の2項目でアセスメントが可能だと考えられる。

- ・「あなたは、嫌な思いをした時、だれに相談しますか。（複数回答あり）」
- ・「あなたは、いじめはどんなことがあっても許されないことだと思いますか。（苦しんだり悩んだりして心が傷つく「いじめ」はどんな理由があっても許されないことだと思いますか。）」

④ 自作アンケート

学校評価や校内研修、ピア・サポートに関するアンケート等、各校で独自に作成しているアンケートのうち、岩見沢型ピア・サポートに関連する項目を集めたところ、次のような内容が挙げられた。

【小学生】

- 学校は楽しいか
- 自分にはいいところがあるか
- 相手の気持ちを考えて声をかけたり行動したりしているか
- 友達のよいところを見つけているか
- ピア・サポートの学習は好きか
- ピア・サポートの自分の事を話したり考えたりする活動で、自分のことがよくわかったり、新しい自分に気づくことがあるか
- ピア・サポートの友だちの話を聞く活動で、友達のことがよくわかったり、新しい発見があったりするか
- ピア・サポートをやって、友達と「話しやすくなった」「仲良くなった」と思うか
- ピア・サポートで学んだことが、学校生活に生かされていると思うか
- 普段の生活の中で、誰かと協力したり、誰かを助けたりすることはできたか
- 普段の生活の中で、誰かに協力してもらったり、助けてもらったりしたか
- 友だちは、あなたの話を最後までしっかりと聞いてくれるか
- 仲間と教え合ったり、聴き合ったりして学んでいるか

- 4月に決めた「目指す姿」を考えながら行動できたか
- 自分のめあてや目標をもって、学習や様々な活動に取り組んでいるか
- これまでのピア・サポートで勉強になったことやできるようになったこと、学びを生かしたことは何か
- ピア・サポートで学んだことを、どんな場面で生かせそうか

【中学生】

- 仲間と良好な関係を築き、安心して学校生活を送っているか
- 仲間の個性を受け入れ、支えあうことができているか
- 学級や学年など誰かのために行動できているか
- あなたは、嫌な思いをした時、誰に相談するか
- 自分には良いところがあるか
- 楽しく学校に通うことができたか
- あなたの学級では、自分の意見を言いやすい雰囲気があるか
- あなたは、日ごろ思いやりをもって仲間と接することができるか

【保護者】

- お子さんは、学校が楽しいと言っているか
- お子さんは、「自分にはよいところがある」と感じているか
- 「仲間と教え合ったり、聞き合ったりする授業」は感じ取れたか
- ピア・サポートに取り組んでいることを知っているか

【教職員】

- 岩見沢型ピア・サポートを実践したことによる成果や課題
- 岩見沢型ピア・サポートを意識してどのような実践をしたか
- ピア・サポート活動の場面での成果や課題
- 特別な支援を必要とする児童生徒にどのようなアプローチをしたか
- 岩見沢型ピア・サポートを実施する上で継続・改善してほしいことは何か

⑤ その他

- ア 保健室の来室者数
- イ 日常の教育活動での見取り（意図的に設定された活動を含む）
- ウ 教育相談

⑤については、教員の経験年数や指導力に左右されたり、主観的な評価が含まれたりすることから、妥当性には欠けるものの、教育的効果を実感する方法としては有効であると思われる。

①②③については、客観性・正確性が保証されたアセスメント方法であると言える。④の項目については、自校の実態にあわせた検証が可能である。今後は岩見沢型ピア・サポートの考えをふまえた評価項目の統一を行い、より客観性を高める必要がある。

6 研究主体校・協力校との連動

岩見沢型ピア・サポートは、各校の実態に応じて実践が異なるという特異性があることから、実践やアセスメント方法をそろえて成果や課題を見出すといった活動は行わず、各校で実践を推進した。

7名の部員も市教委主催の研修を受けながら実践を重ねている段階であることから、毎月の研究部会で市教委主催の研修の振り返りや各校の実践交流を行い、研究を深めた。

7 成果と課題

(1) 成果

- アンケートを実施したことで、担当教員を中心に先生方の声を聞き、希望に応える形で効率的な取組をすることができた。
- 2校種7校の実践資料を共有したことにより、実践の選択肢が広がったことから、各校での実践のハードルが下がった。また、全校的な取組にはつながらなくても、共有された資料を活用して学級で実践したという声もあった。
- 様々なファイル形式で資料を提供したことで、より活用しやすくなった。
- 市教育委員会主催の研修の内容のうち、重点を絞って環流する形で研修会を実施したことで、より研修成果を実践に生かすことができるようになった。また、研修に参加できなかった先生方にも岩見沢型ピア・サポートを知っていただく機会を作ることができた。
- 各校の岩見沢型ピア・サポートの担当教員は、試行錯誤を重ねながら実践を進めていることから、その先生方の悩みや不安を払拭したり、次の実践のヒントを得たりする場として、座談会を開催したことは大いに役立った。

(2) 課題

- 実践資料が集まってきた一方で、その資料の有用性や再現性の検証は不十分である。実践した先生方の声や、アセスメントの結果を踏まえ、資料を整理する必要がある。
- アセスメントの方法や内容については、その羅列に留まってしまった。今後、項目の精選が必要である。
- 校種や学校規模、児童生徒の実態によって、どのような実践が有効なのか異なることから、岩見沢型ピア・サポートの実践による教育的効果を高めるためには、各校の担当教員が、各校のアセスメントに基づいて、理論に基づいた実践を考えていくことが求められる。そのことから、市教委主催の研修は各校の担当教員が3年間全ての研修を受講することが原則となっているが、異動や学校事情によりその実現が困難である場合も少なくない。
新たに担当教員となった先生方を孤立させないためにも、今後も可能な限り、本研修での学びを還元するという形で、研究部会主催の研修会や座談会を行う必要がある。
- 研修会の参加者の内訳を見ると、校内研修という扱いで全教職員が参加した学校がある一方で、中学校教諭や管理職の参加が1割に満たない、研修の案内が校内で周知されないなど、市内各校の実践に対する意識の差が課題である。
- 岩見沢型ピア・サポートは、担当教員が推進することも大切だが、担当教員の実践を支える意味で、校内の担当や担任の有無、研修の参加歴に関わらず、市内の全教職員が“岩見沢型ピア・サポートとは何か”を理解し、実践していくことが大前提である。担当教員だけではなく、全ての先生方が参加しやすい研修の在り方を考えていく必要がある。

次年度、3年計画で始まった市教委主催の研修は、最終年度を迎える。岩見沢型ピア・サポートの実践や、実践する先生方へのサポートを通して、他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子どもの育成を目指して活動を進めていきたい。

7 担当

部長：坂本 千恵（美園小学校）
部員：小野 愛弓（中央小学校） 遠藤 郁（第一小学校）
 端崎 元気（幌向小学校） 辻浦 一裕（光陵中学校）
 山下 香織（清園中学校） 上羽 愛子（明成中学校）

「III 養成」事業について



経営塾『経営力を磨く会』

1 主 旨

次代につながる学校教育の具現化に向け、教育を取り巻く現状を認識し、学校改善にむけて分かりやすいビジョンを掲げ具体的で実効性のある取組を進めることができる実践的な経営力のある校長を養成する。そのために、主体的な塾運営を目指し、交流においては塾生が講師を務めるなどリーダー養成を強く意識した運営とする。

2 目 的

本会は岩見沢市の教育行政方針に基づく自校の確かなビジョンを掲げ、経営・運営できる管理職の育成を目的に実施する。

3 内 容

- (1) 経営交流～岩見沢市の目指す教育を具現化するための学校経営・学校運営を交流する。
- (2) 外部講師による講話～経営に関する知見を深め、組織力や戦略的思考を高める。

4 参加者

校長 12名（教育長からの指名及び若手校長）

5 実施した講義・演習（90分間）

- ① 6月12日（木） オリエンテーション、経営交流（五十嵐・尾見）
- ② 8月21日（木） 外部講師 空知教育局義務教育指導監 眞田 眞 氏
- ③ 9月11日（木） 外部講師 岐阜聖徳学園大学教授 山田 貞二 氏
- ④ 10月 7日（火） 外部講師 札幌新陽高校校長 北村 善春 氏
- ⑤ 12月11日（木） 経営交流（高田・三國）
- ⑥ 2月 5日（木） 経営交流（小林・澤口）

6 今年度を振り返って

本年度の経営塾は、制度理解から実践、さらに校長としての判断と組織づくりに至るまで、学校経営を多面的に捉え直す連続的な学びの場となった。第1回では、義務教育学校や岩見沢型ピア・サポートを通して、子どもを主語に据えた経営と、対話を基盤とする組織づくりの重要性が共有された。第2回では、学習指導要領の変遷を踏まえ、「育成を目指す資質・能力」を経営の軸に据える視点と、生成 AI と対話を融合させたグランドデザイン策定の可能性が示された。第3回では、学校経営哲学の言語化や三領域の整理を通し、主体性を引き出す関わりとウェルビーイングを重視した経営の在り方が明確になった。第4回は、実務を学びに転換する戦略的思考と、課題の真因を共有する組織文化の形成が強調された。第5回では、根拠に基づく校長判断と制度を生かした学校再デザインが提示され、組織として学び続ける学校経営の方向性が確認された。これらの学びは、市内校長が共通言語をもち、協働して岩見沢の教育を創り続けるための確かな基盤となった。



養成塾『教師力を磨く会』

1 主 旨

各学校のミドルリーダーには組織全体を俯瞰して学校運営に参画し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたカリキュラム・マネジメントを主導することが求められる。また、若手教員に対し、日々の授業改善や学級経営について、対話を通じて指導・助言を行い、組織的な教育力の向上を図る中核的な役割が望まれている。本塾では自らの役割を理解し、学校運営の核となる教員の意識と力量を高めることができるよう開講する。

2 目 的

本会は、岩見沢市が目指す「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を創り上げ、それを中核とし学校経営・学校運営に主体的に参画できる教員の育成を目的とする。

3 内 容

- (1) 学校経営・学校運営に関する内容
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりに関する内容
- (3) 若手教員への指導に関する内容



4 参加者

主幹教諭6名、教諭13名、合計19名

5 実施した講義・演習（90分間）

- ① 6月25日（水）＝オリエンテーション、（説明、目標、年間計画）
「ミドルリーダーとしての自らの役割」（協議）
- ② 8月27日（水）＝「ミドルリーダーに望むこと（講話）
講師 教育委員会 教育長 吉永 洋 氏
- ③ 10月15日（水）＝「学校の運営を最前線で担うミドルリーダー」（講義）
講師 岩見沢市立光陵中学校長 桐渕 則行 氏
- ④ 12月17日（火）＝「主体的・対話的で深い学びの実現と若手教員の育成」
（実践交流・協議）
- ⑤ 2月25日（水）＝「ミドルリーダーとして」（振り返り）
講話：教育委員会指導室長 尾花 靖宏 氏

6 今年度を振り返って

一年の塾の流れを通じて、校内での自らの立場を強く意識し、市の目指す教育と各学校の学校経営との関連性、それを踏まえての実践について多角的かつ具体的な認識を持ち、高い意欲と責任感を持って組織の中で校長の示す経営ビジョンを理解し具現化するミドルリーダーとしての役割を果たすことができるように研修を深めてきた。

教育長や校長による講話から学校組織の活性化、同僚性の醸成、そして学校全体の教育力向上に貢献しようとする姿を具体的にイメージし、単なる業務の遂行ではなく、職員全体で当事者意識を持ち、共通理解のもとで学校を動かしていくことの重要性も共有された。

実践交流では学力向上などの様々な学校課題に対し、授業時数特例制度の活用など、教育課程マネジメントの視点から解決策を探る姿勢も見られ、個々の意識の向上が図られた。

実践塾『授業力を磨く会』

1 主 旨

教育の成果を左右する最大の要素は、直接の担い手である教員の資質・能力である。特に、その力が最も発揮される場面は授業である。そこで、市内の初任段階及び教職経験10年未満の教員を対象に「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業力の向上に特化した研修を実施し、全ての教員が質の高い授業を日常的に実践できるよう、本塾を実施する。

2 目 的

本会は、学校教育の基本を学ぶとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりを通して、授業力・指導力の向上を図り、実践に根ざした人材育成と実践力の育成を行うことを目的として実施する。

3 内 容

- (1) 授業講座及び研究協議
- (2) 授業公開による実践研究
- (3) 実践力・指導力向上に向けた演習・研修

4 参加者

教諭35名、養護教諭2名、合計37名

5 実施した講義・演習（90分間）

- ① 6月24日（火）＝説明、自己紹介、演習（年間計画・目標設定・交流）
- ② 8月26日（火）＝「自立した学習者の育成について」（講義・演習）
講師 清園中学校 二瓶 直之 教頭
- ③ 10月14日（火）＝「授業づくりの基本」（授業参観・講義・演習）
講師 日の出小学校 辻 啓吾 教諭
- ④ 12月16日（火）＝「教室の外から見える子どもたちの声」（講話）
～担任の先生に伝えたい“支援のはじまり”～
講師 袖野 美幸 SSW（岩見沢市教育支援センター）
「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実際（実践発表）
東光中学校 小山内 絢夢 教諭
- ⑤ 2月17日（火）＝「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実際（実践発表）
幌向小学校 今野 楓 教諭 中央小学校 山本 愁 教諭
中央小学校 横川 汰一 教諭 緑 中学校 水井 雄太郎 教諭
「本年度のまとめ」

6 今年度をふり返って

今年度は、実践塾のねらいと本市の教育の方向性を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりを中心に、計5回の研修を実施した。校内研修の活性化を担う管理職や、優れた授業実践を積み重ねている教員を講師に招き、これからの授業に求められる視点や基本について、また、子ども理解の重要性について学ぶことで、塾生の授業改善意識の向上を図った。

さらに、校種や教科等を考慮して5つのグループを編成し、授業者の決定、指導案の検討、交流を重ねた。授業公開後には実践に基づく発表と協議を行い、相互に学び合う機会を設けた。養護教諭部会においても、袖野SSWを招き、事例検討を中心とした研修を実施した。塾長・副塾長及び担当養護教諭が中心となり、塾生同士が切磋琢磨しながら、実践的な指導力の向上を図った。

これらの取組を通して、塾生一人一人が授業改善に向けた具体的な視点を得て、実践を語り合い、学びを共有する文化が醸成されつつあることは大きな成果である。一方で、塾生の学びを各校の校内研修や日常の授業改善へいかに波及させていくかが今後の課題であり、学んだ成果を各校の授業改善へと確実につなげるための仕組みづくりが求められる。

「IV 研修」事業について



教職員の専門的力量的向上のための研修講座

1 「岩見沢の教育を知る会」

- ・日時 令和7年4月21日（月）
- ・内容 講話「岩見沢が目指す教育づくり」について
実践発表 「岩見沢型ピア・サポートの実際」岩見沢市立美園小学校
- ・講師 岩見沢市教育委員会 教育長 吉 永 洋 氏
岩見沢市立美園小学校 教諭 黒 田 弥 生 氏
教諭 坂 本 千 恵 氏

本研修は、岩見沢市立小・中学校・義務教育学校へ転入した教職員及び新採用教員を対象に、岩見沢市の教育の方向性やこれまでの取組への理解を深め、自校での実践に生かすことをねらいとして行われた。

はじめに吉永教育長による講話が行われ、学校教育にける思いや期待が語られた。参加者からは、岩見沢市の教育方針への理解が深まり、教職員としての自覚と今年度の目標を明確にする機会となったとの声が多く聞かれた。続いて、美園小学校による実践発表「岩見沢型ピア・サポートの実際」が行われ、具体的で実践的な取組が紹介された。

参加者の振り返りでは、岩見沢型ピア・サポートが、ピア・サポート、協同学習、PBIS、SEL の四つのプログラムから成るMLAとして位置付けられていることへの理解が深まったとの意見が多く見られた。

また、発表内容は自校ですぐに活用できるものであり、校内研修や授業、学級経営に生かしたいという前向きな意欲が示された。

本研修を通して、岩見沢市全体で共通理解のもとピア・サポートを推進し、児童生徒が自ら煌めく教育環境を整えていく重要性が再確認され、研修の目的はおおむね達成された。



2 教頭・研究担当者研究協議会

- ・日時 第1回 4月25日（金）14：30～16：00
第2回 7月28日（月）13：30～16：00
第3回 11月12日（水）14：00～16：00
第4回 1月14日（水）13：30～16：00
- ・内容 全国学力・学習状況調査の結果の交流と校内研究の取組の交流
子どもの変容に基づく校内研究の在り方の協議、研究事業の還元

第1回から第4回までの研究協議会を通して、全国学力・学習状況調査を「結果として捉える」のではなく、「授業改善や校内研究につなげるための手立て」として活用しようとする意識の高まりが確認された。

第1回では、各校の分析や結果の授業への反映や計画の共有を通して、読解力や探究的な学びの重要性、小中9年間を見通した指導の必要性が強く認識された。また、同一校区・同一テーマでの協議が対話の深まりにつながることも明らかとなった。

第2回では、調査結果を踏まえた研究の前半の取組交流により、データを基に児童生徒一人一人の成長を見取る視点や、小中連携の具体化、生成AI活用の可能性と課題が整理された。

第3回では、市全体の分析を基盤に、自校の課題を客観視し、強みを生かした次年度への方向性を共有することができた。3回の協議を通し、教頭・研究担当者が核となり、対話を重視した実践的な研究を進めていく意義が改めて確認された。

第4回では、研究所研究事業の成果と課題が共有され、自校の取組に生かすことや次年度の全国学力・学習状況調査への取組に生かすことが確認された。



3 特別支援教育研修講座

- ・日時 令和7年5月29日（木）14:00～16:00
- ・内容 講義・演習「障がいの特性を考慮した教育課程の編成と実施」
- ・講師 北海道教育庁空知教育局 学校教育指導班 主任指導主事 油川 智史 氏



特別支援学級の学級編制の考え方や法的な位置付けをはじめ、障がいの状態等に応じた指導内容や指導方法、週時程と学習活動の実際等についての理解を深め、一人一人の障がいの状態等に応じた教科指導や自立活動など、障がいの特性に応じた教育課程の編成と実施に資するため、特別支援教育研修講座が行われた。

42名の小・中・義務教育学校の特別支援教育コーディネーターと管理職が参加した。

講師からは、具体例を交えながら、管内の特別支援学級の現状と課題、特別の教育課程を編成する際の留意点、自立活動や交流・共同学習のあり方、特に知的と情緒の教育課程の違い等について、説明をいただいた。

参加者からは、「自閉症情緒障がい学級所属で知的障がいがあり、特別支援学校高等部進学希望の生徒の教育課程について、教科を合わせた指導を実態に合わせて取り入れていくことが例として挙げられており、参考になりました。」「今回の研修内容を職場の先生方にも交流し、正しい知識を持って支援を行っていきようにしていきたい」、「特別支援教育の推進には、管理職としての役割も大きく、学校の方針や組織づくり、教職員への働きかけが重要であると改めて感じました。」等の感想があり、多くの気づきを得ていた。



4 特別支援教育支援員研修講座

- ・日時 令和7年6月19日（木）14:00～16:00
- ・内容 講義・演習
「特別支援教育支援員の基本的な役割と心構え、対応の実際について」
- ・講師 北海道立特別支援教育センター肢体不自由・病弱研究室長 大西 修 氏

各学校において特別な支援を要する児童生徒に対し、担任等と連携の上、学校生活を円滑に送れるようにサポートする特別支援教育支援員を対象として実施した。

講師からは、「特別支援教育支援員の現状と役割」、「障害のある児童生徒の理解」、「障害のある児童生徒の支援のあり方」等について、実例や演習を交えつつ、特別支援教育支援員の基本的な役割と心構え、学級担任と連携して行う子どもへの対応の在り方等についても触れながら、丁寧にご指導いただいた。



参加者からは、「動画等の実例を資料として使っていただき、大変わかりやすく、勉強になりました。」「子どもとの信頼関係を大事にし、声掛けや支援をしていきたいです。」「毎日様子の違う子どもに対し、小さなことでも変化を見逃さず担任の先生と情報交換していきたい。」等の感想があり、明日からの支援に生きる有意義な研修となった。

5 「救急・救命」研修講座

- ・日時 令和7年8月7日（木）、8月8日（金）13:00～16:00
- ・内容 講話・実技講習「救命への心構えと救命処置の方法」
- ・講師 岩見沢地区消防事務組合署員

今年度、岩見沢市に転入してきた小・中・義務教育学校と緑陵高校の教職員80名を対象に、危機管理意識を高め、適切な応急手当の方法を身に付けることで、安全・安心な学校環境の構築を図ることを目的として各日3時間の講習会を実施した。

当日は、前半に動画による応急手当などの救命処置の仕方などを視聴した後、後半は4つの小グループに分かれてAEDや心臓マッサージなどの実技講習が行われた。後日、受講者には、消防署から修了証が交付された。



受講者からは、「心肺蘇生とAED使用の手順は数年ぶりに実技を通して学び直すことができ、繰り返し講習を受けることの大切さを実感しました。」「応急処置と救命処置の違い、AEDの使用場面・使用方法・注意点、救命処置の手順と胸骨圧迫の方法を講話や実技を通して改めて確認できた。」「心肺蘇生には思っていた以上に相当強い力で押さなければならないと分かった。」「学校の日常場面で起こり得る事例を知り、危機管理意識が高まった。本研修により、適切な救命処置の基礎知識を得られ、実技講習により技能を得ることができ、意義深い研修となった。」等の振り返りがあり、安全・安心に学校づくりに生きる研修講座となった。

6 「食物アレルギー」研修講座

- ・日時 令和7年8月6日（水）10:30～11:50
- ・内容 講義・演習 「食物アレルギーの正しい理解とアナフィラキシーショックに対する対処の仕方について」
- ・講師 管理薬剤師 櫻田 則 幸 氏

今年度岩見沢市に転入してきた小・中・義務教育学校と緑陵高校の教職員70名を対象に食物アレルギーの正しい理解とアナフィラキシーショックに関する理解を深め、適切に対応できる能力を養うことで、学校が子どもたちにとって安全・安心に過ごせる場となることを目的として実施した。

市内の薬局勤務の管理薬剤師 櫻田氏を講師に迎えて講義と動画視聴によるアレルギーへの理解や緊急時での対処の仕方、ロールプレイング等を交えてエピペンの打ち方に関する実技演習を通して学んだ。

参加者からは、「エピペンの使用について、本人の意思確認は必要なく、使用するという事だけを伝えればよいこと、『迷ったら打つ』ことを学ぶことができた。」「エピペン使用の際、救急要請や症状の記録や教職員との連携・役割分担の重要性についての学びを教職員で共有し、子どもたちの安全を確保できるような体制を作っていきたい。」等の振り返りがあり、安全・安心な学校づくりに活かされる研修講座となった。



7 ICT 活用に関する研修講座 I

- 日時 令和 7 年 8 月 4 日 (月)
- 内容 説明 Canva を用いた授業活用の実際
Google Sites を活用した校務改善の可能性
演習 Canva による教材づくり
Google Sites の基本操作体験
- 講師 岩見沢市立上幌向中学校 教諭 平 尾 陸 氏
岩見沢市立緑中学校 教諭 柴 田 諒 氏
岩見沢市立第二小学校 教諭 黒 坂 俊 介 氏

本研修は、ICT 活用に関する基礎的スキルの習得を目的とし、Canva および Google Sites の基本操作と活用方法を理解するとともに、授業や校務における ICT 活用の展望を考えることをねらいとして行われた。

研修では、Canva を用いた授業活用の実践例や、Google Sites を活用した校務改善の可能性について説明を行い、その後、教材づくりや基本操作を体験する演習を実施した。実際に操作しながら学ぶ構成により、研修内容を自校での実践につなげやすい内容となった。

研修全体の満足度は高く、多くの参加者が「満足」と回答した。特に Canva については理解が深まり、授業で活用したいと考える教員が大多数を占めた。一方、Google Sites については有効性を理解しつつも、既存の校内システムやスキル面、校務体制の課題から、活用に不安を示す声も見られた。

成果として、ICT ツールの基本的な操作方法や活用の具体像を共有できたこと、他のアプリとの使い分けを考える視点が得られたことが挙げられる。今後は、初級者向け研修や実習時間を重視した研修、生成 AI の活用、校務で組織的に運用できる仕組みづくりなど、より実践的で段階的な研修の充実が求められる。



8 ICT 活用に関する研修講座 II

- 日時 令和 8 年 1 月 9 日 (金)
- 内容 説明 「生成 AI 活用ハンドブック」の説明と確認テスト
講座 I 「生成 AI を活用して、授業計画を作成してみよう！」
＜PC 編＞Google AI Studio の活用方法
講座 II 「生成 AI を活用して、面談日程を作成してみよう！」
＜iPad 編＞Gemini の活用方法
- 講師 岩見沢市立上幌向中学校 教諭 平 尾 陸 氏
岩見沢市立緑中学校 教諭 柴 田 諒 氏
岩見沢市立第二小学校 教諭 黒 坂 俊 介 氏

本講座は、タブレットを日常の授業や校務で活用できるよう、ICT 機器に関する基礎的な知識・技能の習得を目的として実施したものであり、特に生成 AI の実践的な活用に重点を置いた内容とした。

研修は三つの内容で構成した。

はじめに、「生成 AI 活用ハンドブック」の説明と確認テストを通して、生成 AI の基本的な仕組みや活用時の留意点、個人情報への取扱いなどについて共通理解を図った。





続く講座 1 では、Google AI Studio を用い、生成 AI を活用した授業計画や教材アイデアの作成を体験した。講座 2 では、iPad を用いて Gemini を活用し、面談日程の調整やフォーム・スプレッドシートと連携した校務の効率化について実践的に学んだ。いずれも、授業と校務の両面で「すぐに使える」内容となるよう工夫した。

参加者アンケートでは、「大変満足した」「おおむね満足した」と回答した参加者が多く、生成 AI を活用することで授業準備や校務の時短につながる具体的な

イメージをもてたという意見が多数寄せられた。また、初めて生成 AI を使用した参加者からは、「難しいと思っていたが、実際に操作することで活用へのハードルが下がった。」「まずはやってみようと思えた。」といった前向きな感想が見られた。特別支援学級や小学校低学年での活用可能性についても評価が高く、学級経営や教材作成への応用が期待されていることがうかがえた。

一方で、スキルレベルに応じた研修の設定や、後から振り返ることができる資料の充実、情報リテラシーに関する継続的な研修の必要性など、今後の改善につながる課題も示された。

本研修を通して、生成 AI は特別な技術ではなく、日常の教育活動を支える有効なツールであることが共有された。



9 不登校対策研修会

- ・日時 令和7年8月1日（金）9：00～12：00
- ・内容 講義・演習
「不登校の未然防止と対応等について」
- ・講師 日本医療大学 准教授 丸山 正三 氏



市内各小・中・義務教育学校の生徒指導の担当者等26名が参加し「不登校対策研修会」を実施した。講師として、北海道スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザーとしても活躍されている、日本医療大学 総合福祉学部 ソーシャルワーク学科 准教授の丸山正三氏をお招きした。

講義では、各種調査や統計から見てくる不登校の実態やそれにかかわる課題、子どもと家庭に関する不登校の要因の理解などについて詳しく解説があり、これらに対応するに当たってはアセスメントが重要であることが示され、そのポイントや視点を説明していただいた。

具体的な事例をもとにアセスメントの演習も行われ、参加者は学校として児童や家庭にどのように働きかけるかなどについて熱心に協議した。

参加者の振り返りからは、講義内容や事例検討に対して高い関心と理解が得られ、「ストレングス視点」や「事例性」という新たなアセスメントの考え方に関心が寄せられるとともに、不登校の背景や家庭の課題に関する情報が現実的・実践的であり、「見えていない部分に気づかされた」という声が多数上がるなど、成果を得ていた。



10 事務職員研修講座

- ・日時 令和7年7月15日(火) 14:00~16:00
- ・内容 講話・協議「学校事務職員としての役割や職務について」
- ・講師 北村小学校事務 上原 耕平 氏

市内の若手事務職員7名の参加のもと、北村小学校事務職員の上原 耕平氏を講師に迎え、講座を実施した。

講師からは、これまでの勤務校での事例や体験談も交えながら、現在の勤務校での業務内容を中心に、学校経営の参画に向け、事務職員として心がけていること等の講話をいただいた。その後の協議の場では、日頃の業務での成果や課題、疑問に思っていること等を交流し、今後の業務改善等に向けての糸口や気づき、学びが見られた。

日々の勤務での疑問や悩みを持つ参加者からは、「一日のルーティンを決め、業務の効率化、改善を図れるように心がけたい。」「一人職だからこそ横の繋がりを大切にしたい。」「学校全体を見て事務の立場からできることを探したい。」「地域と学校をつなぐ役割を担い学校経営に効果的なことに取り組みたい。」等のふり返りがあり、有意義に研修を終えることができた。



11 教育講演会

- ・日時 令和7年9月12日(金) 14:00~16:00
- ・内容 講話「生成AI時代、GIGAスクール時代の学習指導要領改訂の方向性」
- ・講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤 久慶 氏

令和7年度「教育講演会」は、各コミュニティ・エリアにおけるオンデマンド方式のビデオ視聴とし、市内小・中・義務教育学校の教職員421名が参加した。

参加者アンケートによると、講話全体の満足度については「非常に満足」「満足」を合わせて約9割に達し、また「教育実践への役立ち度」や「内容の理解しやすさ」においても、いずれも9割以上が肯定的に評価しており、講演会は全体として高い評価を得た。自由記述では、具体的な事例やデータを通して学習指導要領改訂の方向性を理解できたこと、子どもの主体的な学びや授業改善への示唆を得られたことなどが多く挙げられた。



特に、参加者の関心は「主体的・対話的で深い学び」や自己調整学習、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な推進、資質・能力の育成といった学びの質に集中していた。また、GIGAスクール構想の進展を踏まえ、ICT活用による学習の多様化や個別最適化への期待が示される一方、情報活用能力や情報モラルの育成、教員の負担増、具体的な実践例の不足など、現場が抱える課題も明らかとなった。さらに、探究的な学びや教科横断的な視点、評価の在り方、言語活動の工夫など、授業改善やカリキュラム・マネジメントに関する問題意識も多く見られた。

本講演会は、急速に変化する社会の中で求められる教育の方向性について理解を深めるとともに、今後の授業改善や学校づくりを考える有意義な機会となった。

「V 連携」事業について



北海道及び全国教育研究所連盟との連携

岩見沢市立教育研究所は、北海道立教育研究所が事務局を担う北海道教育研究所連盟に加盟し、総会や研究発表大会へ参加するほか、共同研究の推進にも取り組んでいる。さらに、全国教育研究所連盟にも加盟し、オンラインによる研究協議会や発表大会に参加することで、最新の教育情報や実践に触れる機会を確保している。

1 北海道教育研究所連盟との連携

(1) 定期総会 Web 会議サービスによるオンライン開催

- ・期 日 令和7年4月24日(木)
- ・内 容 令和6年度事業及び会計決算報告、監査報告、令和6年度事業計画案及び事業計画案、予算案、道研連役員案及び全教連北海道地区委員案の承認等
(今後の北海道教育研究所連盟の研究・研修事業の在り方について、情報提供あり)

(2) 第80回北海道教育研究所連盟研究発表大会(胆振大会)兼第67回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会

- ・日 時 令和7年8月28日(木)～8月29日(金)
- ・会 場 だて歴史の杜カルチャーセンター
- ・内 容

[記念講演]

演 題 「一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて
～次期学習指導要領改訂の論点を踏まえて～」

講 師 国立教育政策研究所

初等中等教育研究部長 しろうす 白水 始 氏

[対話・演習]

タイトル「新たな教職員の学びの姿の実現を目指して」

講 師 独立行政法人教職員支援機構員



(3) 所員学習会

① 夏季所員学習会 令和7年7月11日(金) 11:00～15:35

- ・形 態：ハイブリッド開催
- ・内 容：授業公開(北広島市立東部小学校 3年 国語科)
「資質・能力の育成に向けた国語科の授業づくり～全国学力・学習状況調査を踏まえた学習指導の改善・充実～」に関する講話・協議等

② 冬季所員学習会 令和7年11月17日(月) 14:00～16:30

- ・形 態：ハイブリッド開催
- ・内 容：「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実に向けた授業の具体について」に関する講話・協議等

2 全国教育研究所連盟との連携

(1) 全国教研究所連盟研究発表大会(岡山大会) オンラインにて開催

- ・日 時 令和7年6月4日(水) 10:40～16:35
- ・内 容 講演「令和の日本型学校教育の構築を目指して～これからの研修のカタチ～」
講 師 上智大学 教授 奈須 正裕 氏
研究発表 4機関からの課題研究報告

北海道教育大学岩見沢校等との連携

北海道教育大学岩見沢校並びにコンサドーレ北海道スポーツクラブの協力により、出前授業を実施した。

本事業では、岩見沢市内の小・中・義務教育学校において、高い専門性をもった教育大学岩見沢校の教員やコンサドーレサッカースクールのコーチによる一単位時間の派遣授業を行うことで学校教員の各教科指導における指導技術や指導内容等の一層の理解を深めるとともに児童生徒の学習内容の深化と学習意欲の向上を図ることをねらいとして、のべ19回実施した。

1 実施までの流れ

4月	岩見沢校並びにコンサドーレスクールに対する本事業への協力依頼
5月	市内小・中・義務教育学校へ実施希望の取りまとめ
6月	実施可否のマッチングと実施内容の決定
7月～	各学校での出前授業の実施

2 今年度実施した出前授業の内容

バレーボール
器械運動
アダプテッド・スポーツ
サッカー
音楽づくり、創作

3 実施した出前授業の状況

(1) バレーボール

- | | |
|-------------|---|
| ① 講 師 | 北海道教育大学岩見沢校 浅井雄輔准教授 |
| ② 実 施 内 容 | どの技能レベルでも、楽しむことができるバレーボールの試合とは？ |
| ③ 実施月日・対象 | 7月 7日 志文小学校 5学年 27名
9月 9日 幌向小学校 6学年 45名
11月13日 北真小学校 5学年 16名
11月20日 南小学校 5学年 64名 |
| ④ 授 業 の 様 子 | ボールを投げたりキャッチしたりの攻防によるネット型のゲームの基本、得点をするための作戦、誰もが楽しめるルールの策定など |



(2) 器械運動

- ① 講 師 北海道教育大学岩見沢校 小倉晃布准教授
- ② 実施内容 マット、跳び箱、鉄棒などの器械運動
- ③ 実施月日・対象
- | | | | |
|--------|-------|-----|-----|
| 11月 4日 | 清園中学校 | 3学年 | 53名 |
| 11月17日 | 志文小学校 | 3学年 | 39名 |
| 12月 1日 | 第一小学校 | 5学年 | 54名 |
| 12月 2日 | 幌向小学校 | 4学年 | 37名 |
| 12月15日 | 南小学校 | 4学年 | 55名 |
- ④ 授業の様子 マット運動や跳び箱運動の基本的な動きにつながる準備運動、様々な用具を組み合わせた児童生徒の課題に応じた練習方法、上手な回転や飛び越えのポイントなど



(3) アダプテッド・スポーツ

- ① 講 師 北海道教育大学岩見沢校 大山祐太准教授
- ② 実施内容 障害やアダプテッド・スポーツの概念解説、アダプテッド・スポーツの体験
- ③ 実施月日・対象
- | | | | |
|--------|-------|-------|-----|
| 8月26日 | 志文小学校 | 5学年 | 27名 |
| 11月10日 | 中央小学校 | 6学年 | 58名 |
| 11月11日 | 第一小学校 | 4学年 | 64名 |
| 11月19日 | 東小学校 | 5・6学年 | 95名 |
| 11月27日 | 幌向小学校 | 5学年 | 44名 |
- ④ 授業の様子 スポーツのルールや種目を工夫することで障害者を含め誰もが楽しめることの講話、実際の体験（ブラインドサッカー、ボッチャ、競技用車いす、アンプティサッカー、ゴールボール、車いすカーリング、フライングディスク 等）



(4) 音楽作り、創作

- ① 講 師 北海道教育大学岩見沢校 金崎惣一講師
- ② 実 施 内 容 身近な音環境を題材とした鑑賞領域と表現領域（特に音楽づくり・創作分野）をつなぐ活動
- ③ 実施月日・対象 9月 3日 岩見沢小学校 2学年 38名
2月12日 中央小学校 6学年 58名
- ④ 授 業 の 様 子 身の回りのさまざまな音を集めて、グループで音を創作する活動など



(5) サッカー

- ① 講 師 コンサドーレサッカースクール 金澤孝憲チーフ他
- ② 実 施 内 容 サッカー
- ③ 実施月日・対象 10月30日 志文小学校 4学年 31名
11月 6日 南小学校 3学年 60名
11月27日 北村小学校 1・2学年 16名
- ④ 授 業 の 様 子 ボールと身体の協応運動、サッカーの動きの基本的な練習、ミニゲームなど



「VI 普及」事業について



情報の発信

1 所報「いわみざわ」の発行……年間5回

研究所からの情報発信媒体の一つとして年5回所報「いわみざわ」を発行している。5回のうち、2回は紙で配布し、残りの3回はPDFによるデジタル配信をしている。

(1) 第175号を5月16日に発行（紙媒体）

令和7年度のI～VIの6つの事業について、今年度の計画の概要を紹介した。



(2) 第176号を7月15日に発行（PDF ファイル）

年度初め授業公開の様子と夏季休業前までの研修講座の実施の状況、出前授業の開始の案内等について掲載した。



(3) 第177号を10月17日に発行（PDF ファイル）

教育研究所の部会研究のうち、「教科等研究部会」と「外国語研究部会」の中間報告を掲載した。



(4) 第178号を12月15日に発行（PDF ファイル）

前号に続き、「道徳科研究部会」「情報教育研究部会」「ピア・サポート部会」の中間報告と6月～8月に行った研修事業の様子を掲載した。



(5) 第179号を3月2日に発行予定（紙媒体）

今年度の各事業における取り組み内容を総括する予定。

2 研究所「ブログ」での発信……随時

市内の各学校へのタイムリーで新鮮な情報発信手段として、ブログを随時更新している。

昨年3月3日から、ブログのURLを変更するとともに全体のデザインを一新し、運用を始めた。

(<https://ie-labo.jp.org/>)

4月からの記事の投稿の状況は、

月	記事数
4月	9件
5月	8件
6月	2件
7月	2件
8月	6件
9月	1件
10月	4件
11月	17件
12月	6件

となっている。



記事の内容は、当研究所で行った研修の実施状況、市内の学校の公開研究会の開催情報、授業公開の様子、出前授業の実施風景のほか、所報や事業報告書などの各種資料等がダウンロードできるリンクがあり、今後も積極的に情報発信の手段として活用していきたい。

岩見沢市教科書センターとしての機能

1 常設展示

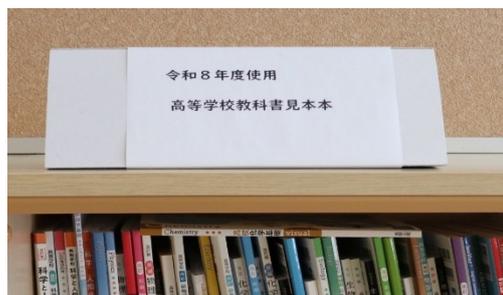
- 市内の小学校（令和6～9年度使用）、中学校（令和7～10年度使用）及び緑陵高等学校が現在使用している教科用図書を展示

令和7年度～10年度使用 中学校用教科用図書								
教科	国語	書写	社会			地 図	数 学	理 科
			地理的分野	歴史的分野	公民的分野			
出版社名	光 村	光 村	教 出	教 出	教 出	帝 国	東 書	東 書
教科	音 楽		美 術	保健体育	技術・家庭		英 語	道 徳
	一 般	器楽合奏			技術分野	家庭分野		
出版社名	教 芸	教芸	光 村	学 研	東 書	東 書	教 出	光 村



2 令和8年度用 高等学校の教科用図書展示会

- 高等学校が令和8年度用として採択する教科用図書の見本本を展示



3 施設の貸与及び利用状況

4 令和7年度研究所職員一覧



施設の貸与及び利用状況

1 施設の貸与

当研究所の施設を、教育意義のあるものに限り開放している。原則として次のような事業について開放している。

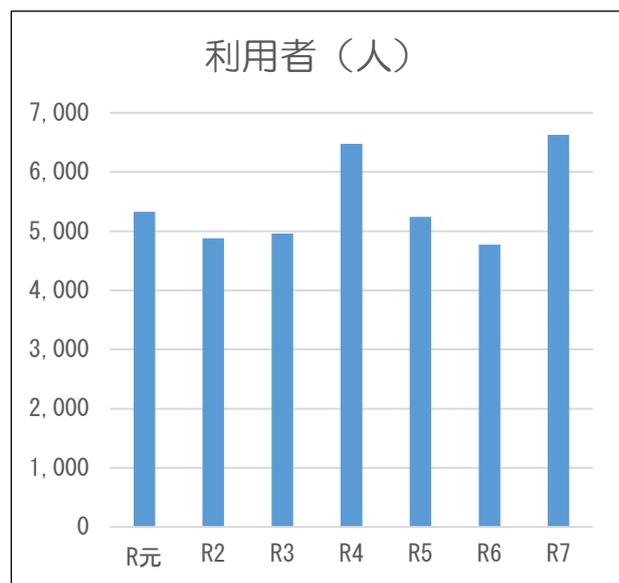
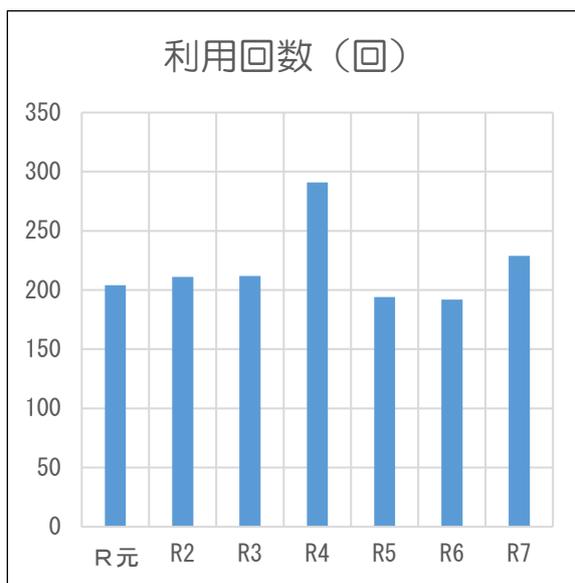
- (1) 教育大学との連携事業
- (2) 学校教育など幼児、児童生徒に関する事業
- (3) 市教育研究団体及び学校職員の研修活動に関する事業
- (4) 地域連携型及び市民開放型の事業

2 施設の利用状況

令和元(2019)年度～令和7(2025)年度における教育研究所の施設の利用状況は次のとおりである。オンラインによる会議等も継続しながら、対面での研修事業・教職員の養成講座・諸会議等、幅広く利用されてきた。

なお、令和7(2025)年度の利用回数及び利用者数(※)は、12月末現在の数字である。

年 度	利用回数(回)	利用者(人)
令和元(2019)年度	204	5,327
令和2(2020)年度	211	4,878
令和3(2021)年度	212	4,960
令和4(2022)年度	291	6,475
令和5(2023)年度	194	5,240
令和6(2024)年度	192	4,771
令和7(2025)年度	※229	※6,627



令和7年度研究所職員一覧

1 令和7年度岩見沢市立教育研究所運営委員

役職	氏名	区分	所属
委員長	山本 理人	学識経験者	北海道教育大学岩見沢校
副委員長	石原 学	学校教育	岩見沢市校長会
委員	黒島 敏	学識経験者	北海道岩見沢緑陵高等学校
委員	大塚 浩介	社会教育	岩見沢市PTA連合会
委員	中川 美愛	社会教育	岩見沢市PTA連合会
委員	杉澤 圭子	社会教育	いわみざわ男女共同参画プラン推進市民会議
委員	大和 勝	社会教育	岩見沢青年会議所
委員	鈴木 佳夫	社会教育	岩見沢市文化連盟
委員	中井 一徳	学校教育	岩見沢市教頭会
委員	林 大輔	学校教育	第一小学校
委員	成田 照之	学校教育	緑中学校

2 令和7年度岩見沢市立教育研究所職員一覧

職名	氏名	所属	新・再	所属部会
所長	砂川 昌之	教育研究所	再	道・外・情・ピ部会
専任所員	廣瀬 一仁		再	教・外・情部会
	山本 昌子		新	教・道・ピ会
	木村 吏		再	(管理業務)
所員	黒坂 俊介	第二小学校	再	道研連・情報教育部会
	坂下 邦子	志文小学校	再	道研連・教科等部会
研究員	高橋 周	南小学校	再	教科等部会部長
	山崎 慶子	東光中学校	新	道徳科部会部長
	石川 亜紀	くりさわ学舎	再	外国語部会部長
	平尾 陸	上幌向中学校	再	情報教育部会部長
	坂本 千恵	美園小学校	新	ピア・サポート特別部会部長
	専門員	堂前 勇太	光陵中学校	新
西亦 直明		日の出小学校	新	
伊丹 暁		明成中学校	新	
齊藤 久子		東小学校	新	道徳科部会
茂古沼 佳奈		岩見沢小学校	新	
村上 捷太		幌向小学校	新	
浦瀧 直人		豊中学校	新	
宮本 将輝		北村小学校	再	外国語部会
高嶋 裕美子		北村中学校	再	
今 雅彦		第一小学校	新	情報教育部会
上原 千鶴		北真小学校	新	
柴田 諒		緑中学校	再	
小野 愛弓		中央小学校	新	ピア・サポート特別部会
遠藤 郁		第一小学校	新	
端崎 元気		幌向小学校	再	
辻浦 一裕		光陵中学校	再	
山下 香織	清園中学校	新		
上羽 愛子	明成中学校	新		



Copyright 2021 Iwamizawa education Laboratory

岩見沢市立教育研究所

〒068-0835 岩見沢市緑が丘2丁目34番地1
(北海道教育大学岩見沢校キャンパス内)

TEL 0126-22-4412 Fax 0126-22-5317

E-mail kenkyujo@edu.hamanasu.com

ブログ <https://ie-labo.jpn.org/>

